

# ケルシェンシュタイナー教育学の基底としての前半生 (I)

山 崎 高 哉

—Georg Kerschensteiner, Die erste Hälfte seines Lebens  
als Grundlagen für seine Pädagogik (I)—

YAMAZAKI Takaya

## 目 次

はじめに——本研究のテーマと基本的立場	27ページ
第1部 ケルシェンシュタイナーの前半生——	
誕生からミュンヘン市視学官になるまで	32ページ
第1章 ケルシェンシュタイナーの誕生と両親の彼への影響	33ページ
第2章 幼少年期のケルシェンシュタイナー	38ページ
第3章 師範学校時代のケルシェンシュタイナー	42ページ
第4章 国民学校時代のケルシェンシュタイナー	48ページ
第5章 学生時代のケルシェンシュタイナー	54ページ
〈注〉	62ページ

## はじめに——本研究のテーマと基本的立場

1982年1月15日、ゲオルク・ケルシェンシュタイナー (Georg Kerschensteiner, 1854, 7, 29-1932, 1, 15) が生まれ、育ち、学びかつ活動し、「教育のメッカ」としてその名を全世界に轟かしめ、そこで78年の波乱に富んだ生涯を閉じたミュンヘン市は、バイエルン州文部省と共催で彼の没後50年を記念する催しを行った。その記念式典において当時のバイエルン州文部大臣マイヤー (Hans Maier) 教授は、今日「新たに<sup>1)</sup>」、あるいは「再び見いだされた<sup>2)</sup>」ケルシェンシュタイナーの意義を数え挙げ、次の3点を指摘した。まず第一は、書物中心の、現実から遊離した「学術的陶冶 (akademische Bildung)」優先の学校経営から、「労作 (Arbeit)」中心の、「庶民の生活の必要 (Lebensnotwendigkeiten des Volkes)」にも配慮した学校経営への転換を推進し、「ドイツの教育を新人文主義的に狭めることの真の克服者<sup>3)</sup>」となり得たケルシェンシュタイナーであり、第二は、「職業学校の設立者 (Begründer der Berufsschule)<sup>4)</sup>」、職業及び職業界の教育的価値の発見者としてのケルシェンシュタイナーであり、最後に、学校と教育の意味の理解者であり、「弁護者<sup>5)</sup>」であったケルシェンシュタイナーである。

またミュンヘン市とバイエルン文部省は、1984年7月29日、ケルシェンシュタイナーの生誕130周年を祝い、その記念として『ゲオルク・ケルシェンシュタイナー——今日の学校制度に対する彼の活動と理念の意義』(Georg Kerschensteiner. Beiträge zur Bedeutung seines Wirk-

ens und seiner Ideen für unser heutiges Schulwesen) という書物を出版した。この書物は、上述のマイヤー教授の没後50周年記念式典での挨拶を巻頭に収めるとともに、ケルシェンシュタイナーの「経歴」とミュンヘン市視学官としての活動を紹介し、しかる後に、彼の「労作学校 (Arbeitschule)」や「公民教育 (Staatsbürgerliche Erziehung)」の理念、「教師像 (Lehrerbild)」と、それに彼の「補習学校 (Fortbildungsschule)」から「職業学校」への改革活動が今日の学校と教育に与える「衝撃 (Impulse)」を明らかにしている。ミュンヘンとバイエルンにとって、ケルシェンシュタイナーは、彼程「ドイツの教育制度の根本問題を取り上げ、自らの理念と認識を学校において実現した」人は他にいない「偉大な教育 (学) 者<sup>6)</sup>」の典型なのである。

更に、1986年4月14日、ミュンヘン市は、1906年彼自身の創設になり、1924年彼の70歳の誕生日を祝って、「ケルシェンシュタイナー実業学校 (Kerschensteiner Gewerbeschule)」と名付けられた、今日のリープヘア街職業教育センター (Das Berufsbildungszentrum an der Liebherrstraße) の竣工80周年記念祭を挙行了した。この式典で挨拶に立ったクローナヴィッター (Georg Kronawitter) 市長は、若干の組織的変更が加えられているにもかかわらず、この学校では「今なおケルシェンシュタイナーによって示された諸原則が通用している」と、その創設者の業績を讃えた。例えば、市長の言によれば、今日教えられている「個々の教科の範囲と種類やその時々の時間数は殆ど変わっていない」し、「ケルシェンシュタイナーの本当の意向に沿って、職業の理論と実践が教えられており、彼が職業学校制度改革の際、同業組合や親方の協力を求めて発展させた「二元制度 (Das duale System)」——職業学校教育と企業訓練との連携・結合——も、「今日までその有効性が実証されている<sup>7)</sup>」。

ところで、冒頭から、ケルシェンシュタイナーの50回忌や生誕130年、それに「ケルシェンシュタイナー実業学校」の設立80周年を契機に、彼の地元ミュンヘン市やバイエルン州が彼の理念や業績を回顧し、それらの今日的意義を改めて問い直そうとしている様子を紹介したが、彼らのこのような努力から、我々は一体何を読み取ることができるのであろうか。もちろん、「いや、それは単にドイツ人のお祭り好きとバイエルンやミュンヘンのお国自慢に過ぎないよ」とにべもなく断言する人もいるかも知れない。たしかに、そのような理由も全然根拠がない訳ではないが、しかし、ケルシェンシュタイナーの理念や業績を回顧して、その意味を今日に生かそうとする彼らの努力の真剣さには、それ以上のものが含まれていると言わざるを得ない。

周知のごとく、1960年代半ばから70年代初頭にかけて、ドイツ連邦共和国 (西ドイツ) は、教育の力に対する楽観的な期待に支えられて相次ぐ教育改革の嵐を経験した。ボン大学教育学研究所のガイスラー (Erich E. Geißler, 1928-) 教授によれば、そのような教育改革に寄せられた期待とは、まず、「国際競争力の確保、効率豊かな経済の発展、可動性に富む労働市場にとって不可欠の柔軟性の育成、そしてまた、社会的上昇機会の増大<sup>8)</sup>」であった。これらの期待にこたえるべく構想された改革政策の主なものとしては、アビトゥア (Abitur, 大学入学資格) 取得者並びに大学卒業生の量的拡大とそのため大学の拡充・新設、伝統的な「垂直的に区分された学校制度」(特に中等教育段階における三分岐学校制度 Das dreigliedrige Schulsystem と10歳時における早期選抜) に代わる「水平的に区分された学校制度」(統合された総合制学校 die integrierte Gesamtschule) の導入とそれによる学校間の「透過性 (Durchlässigkeit)」の増大、更に就学前教育 (補償教育 die kompensatorische Erziehung を含む) の充実・強化、教員養成制

度の改革，カリキュラム改訂などが挙げられるであろう。だが，これらの改革は，大きな期待と希望をもって着手されたにもかかわらず，学校内外にその意図に反したさまざまな副次作用——例えば，①大学生数の急増（60年代当初と比べ4倍増，100万人強）と大学入学者制限（Numerus clausus）の深刻化 ②大学卒業者就職難 ③ギムナジウムと実科学校における生徒数の爆発的増加（かつての30%から60%へ）とアビトゥアの価値下落（60年代半ばの同一年齢層の8%から22%へ） ④競争の激化と「達成（成績）の圧迫（Leistungsdruck）」 ⑤基幹学校（Hauptschule）の「残り者の学校（Restschule）」化 ⑥総合制学校をめぐる政治的対立 ⑦職業教育の軽視 ⑧「学校恐怖」ないし「学校不安（Schulangst）」の多発等——をもたらし，その結果，70年代後半以降改革への幻滅，諦めが支配的にならざるを得なかった。ガイスラー教授は，このような経緯を「教育多幸症（Bildungseuphorie）」ないし「教育的楽観主義（Bildungsoptimismus）」から「教育的悲観主義（Bildungspessimismus）」への転回，回帰と特徴付けている<sup>9)</sup>。

それはともかく，現実の教育政策担当者は手を拱いてこの事態を傍観している訳にはいかない。彼らには，もちろん，これまでの改革によって達成され，よきものと確認されたものは続行し，更に発展させるとともに，上に見たような改革に伴う予期せぬ不都合を除去し，改善するという骨の折れる仕事が残っている。前述のバイエルン文部省とミュンヘン市の共編著『ゲオルク・ケルシェンシュタイナー』の序文には，次のように書かれている。「我が国の文化・教育政策は，『成長（Wachstum）』と『改革（Reform）』によって特徴付けられている嵐のような発展の年月を経験してきた。……しかし，近年せつかな公衆によってしばしば余りにも性急に要求され，政治家たちによって同様にすばやく受け容れられた嵐のような改革に代わって，できる限り多くの関係者の同意に基づいた慎重な発展が続けられるのでなければならない<sup>10)</sup>」と。このような「嵐のような改革（stürmische Reformen）」ではなく，「慎重な発展の継続（behutsame Weiterentwicklung）」が必要になっている今日，またマイヤー前バイエルン州文部大臣の表現を借りて言えば，「教育制度の巨大な組織的拡大」ではなく，「新たな教育運動」が，「外から」の改革，つまり「社会的動向への順応」という形の改革ではなく，「内から<sup>11)</sup>」の改革，学校と教育に対するより深い意味の理解に基づく改革が必要になっている今日，ケルシェンシュタイナーの理念や改革の提案は，多くの領域で，依然として「時宜にかなった（aktuell）<sup>12)</sup>」ものであり，今日の学校制度の改善と青少年の幸せのために利用し得ると見なされているのである。バイエルン州やミュンヘン市の教育政策担当者のケルシェンシュタイナーへの熱い視線，ケルシェンシュタイナー復権への真剣な努力は，こうした西ドイツにおける現在の教育状況との関連で見れば，その狙いがよりよく理解されるであろう。

以上，私が，やや唐突に，バイエルン州やミュンヘン市における「ケルシェンシュタイナー・ルネサンス」への兆しについて紹介してきたのは，他にもない，ケルシェンシュタイナーと彼の業績が，彼の生きた時代と現代との間の大きな政治的，経済的，社会的変化にもかかわらず，今日なお西ドイツの——同時にまたほぼ類似の教育状況にある日本の——緊急の教育課題を克服するに足る「現代性（Gegenwärtigkeit）」を備えていることの証左の一つになると考えたからである。こうした事実は，「生けるケルシェンシュタイナー（Der lebendige Kerschensteiner）」像を浮き彫りにすることを彼の研究の重要な柱にしている私にとって，力強い励ましであることは言うまでもない。

だが、もちろん、ケルシェンシュタイナーの遺産の現代性は、冒頭に紹介した幾つかの側面だけに尽きるものではない。彼の思想と活動はより多方面にわたり、従って、それらの全体像をより包括的、統一的に把握し、彼と彼の業績が現代に対していかなる意味を持ち、また持ち得るかを問い直し、新たに発見していかなければならない。更にまた、彼の教育学の特質の一つが、ドルヒ (Josef Dolch, 1899-1971) が指摘するように、「すべての人、すべての時代に有効な処方箋を書くことを約束したのではなく、彼の時代に、その時代が必要としたものを与えた」ところにあり、それ故にこそ、彼の教育学が「現代にもなお多くのことを語りかけてくる独特の秘密がある<sup>13)</sup>」ことを思えば、彼の生きた時代の政治的、経済的、教育的現実と彼の業績の教育思想的、制度史的背景を解明することも、ケルシェンシュタイナー理解への正しい道を開くのみならず、彼と彼の業績が持つ意義——それには歴史的意義と同時に現代的意義も含まれているが——を見極めるために不可欠の作業となるであろう。

現代に生きるケルシェンシュタイナーの姿を浮き彫りにするという研究意図との関連において、図らずも、私のケルシェンシュタイナー研究への方法論的アプローチを語ることになった。もちろん、これは極めて根本的な問題であるので、ここでもう少し詳しく説明を加えておくことにしよう。

まず初めは、ケルシェンシュタイナーの多方面にわたる思想と活動をより包括的、統一的に捉え、彼の総合的全体像を構成しようとする試みについて——。もとより、彼の総合的全体像を構成することは、決して容易な作業ではない。因みに、従来のドイツ及びわが国におけるケルシェンシュタイナー研究を纏いてみても、この試みに成功しているのは、僅かにヴェーレ (Gerhard Wehle, 1924-) の『ゲオルク・ケルシェンシュタイナーの生涯の仕事における実践と理論』(Praxis und Theorie im Lebenswerk Georg Kerschensteiners. 1956. 2. neubearbeitete Aufl., 1964) とヴィルヘルム (Theodor Wilhelm, 1906-) の『ケルシェンシュタイナーの教育学——その遺産と不運』(Die Pädagogik Kerschensteiners. Vermächtnis nud Verhängnis. 1957) の二書を挙げ得るに過ぎない。他のケルシェンシュタイナー研究の殆どは、彼の理論的、体系的に纏め上げられた著作だけを取り扱い、彼の教育学説とその理論的展開を分析・解剖することに研究の視角を限定している。しかし、周知のごとく、ケルシェンシュタイナーがその78年の生涯において、「教育学」の舞台に初めて登場するのは、1899年、彼45歳の時であり、彼の教育理論がある程度体系的に展開され始める「概念的著作 (Begriffsschriften)」が出版され、名実ともに「教育理論家」・「教育学者」の仲間入りをするのは、更に遅く、1910年彼56歳以降のことである。それまでの彼は、初め国民学校の、そして後には、ギムナジウムの卓越した教師・教育者であり、1895年以来、ミュンヘン市「視学官 (Schulrat)」として、創造的な学校組織家・教育改革者であった。「教育学者ケルシェンシュタイナー」の背後には、このような、教師・教育者としての長年にわたる活動と豊かな経験が、また教育行政官としての苦難に満ちた実践的改革活動とその学問的、客観的基礎付けへの必死の努力が横たわっていたのである。従って、彼の研究にとって何よりも必要なことは、教育学者としてのケルシェンシュタイナーばかりに目を向けるのではなく、その根底にある教師・教育者としてのケルシェンシュタイナー及び学校組織家としてのケルシェンシュタイナー、一言にして言えば、「実際教育家」ケルシェンシュタイナーにより多くの照明を当て、教育の理論家ケルシェンシュタイナーと実際家ケルシェンシュ

イナーとを「一人の人」として全体的、統一的に捉えることでなければならない。そうすることによって初めて、多くのケルシェンシュタイナー研究が示す著しい実際教育家ケルシェンシュタイナー軽視の傾向、従ってまたそこから構成されるケルシェンシュタイナー像の一面性・半面性を克服できるとともに、これまで以上に、彼の教育学がいかなる背景・現実の下に、また彼の実践とのいかなる関連において成立したのか、彼の教育学成立の発端と過程をより詳細・鮮明に描きだすことが可能になるのである。そして、このようにして理論と実践が不可分に結び付き、たしかにまだ体系化されてはいないが、しかし、生き生きとした洞察と思想に満ち、疑いもなく実り豊かな彼の教育学の発端を顧にすると同時に、ヘルバルト学派や他の指導的教育改革者たちからの「批判の十字砲火 (Kreuzfeuer der Kritik)<sup>14)</sup>」を浴びながら、それに抗して自己の改革的業績の基礎付けと正当化に努め、「自覚した教育学者 (ein selbstbewußter Pädagoge)<sup>15)</sup>」にまで成長していく彼と彼の教育学の発展過程を逐一辿ることは、晩年のケルシェンシュタイナーの教育学体系に対する必ずしも高くない評価——それは、例えば、彼の教育学体系を独創的なものとは認め難いとする多くの研究者の評価や、また彼の思索と体験の集大成とも言うべき『陶冶の理論』(Theorie der Bildung, 1926) が成程「うやうやしい沈黙でもって迎えられたが、しかし、殆ど読まれなかった<sup>16)</sup>」という報告にも示されているが——に対して、その体系の底に埋もれてしまっている彼本来の、生きた本質を摘出し、それによって、彼の教育学の独自性とそれが語りかけてくる優れて今日的な意味を弁証することにつながるべきと言え言い得るであろう。

次に、ケルシェンシュタイナーの生きた時代の歴史的、社会的現実の分析と彼の業績の教育思想史的、制度史的背景の解明の必要性について——。言うまでもなく、彼の業績は、彼の生きた時代の精神的風土並びに課題と固く結び付いている。教育行政官としての彼は、「実際家」の常として焦眉の急となった時代の課題と真っ向から取り組まざるを得なかったのであり、従ってまた、とりわけ彼の「前期教育学」——私は、1899年から1912年ころまでの彼の教育学をそう呼ぼうと思う——は、その時々具体的な教育状況を包括的に捉え、その意味を解釈し、教育実践のための「状況可変的 (situationsvariant)」（エックハルト・ケーニッヒ）な命題を導き出そうとしている。もっとも、1914年以降の彼は、「状況不変的 (situationsinvariant)」な、つまり、普遍妥当的な規範命題を求めようとして悪戦苦闘するのであるが……。それはともあれ、今見たような彼の教育学の成立事情から、彼と彼の教育学は、正に「時代の子」であるという特徴を、それ故に、また多くの時代的制約と限界を担っているのである。彼の理念と活動を全体的、統一的に把握しようとするれば、当然、彼の理念と活動をどこまでも「内在的」に捉え、かつ「内在的」に批判しようとする試みることになる。彼の業績を単に「対象」として問うとか、現在という時点に視点を固定して、そこから「超越的」に吟味するという方法を私は取らない。更に、彼の業績に一定のイデオロギー的、ないし学派的尺度を外から当て、そのような尺度による「批判のための批判」を行うというような立場も私の立場ではない。何気なく語られる一言ですら、語る人によってその意味内容が異なることがよくあるものである。それはやはり、その人の生きた生 (Leben) と時代に深いかかわりを持っているからに他ならない。単に表面に現れた、この場合、著作や制度に定着された言葉や論理、構成を追うだけでは、ケルシェンシュタイナーのような人の思想や活動の本当の意味が分かる筈がない。私がこれまでのいかなる研究にもまして、彼の性格形成の歩みや教師・教育者としての実践活動と体験、学校組織家としての業績の記述に、ま

た彼の教育学の発展過程——彼の古典的な、及び同時代の教育学者・哲学者・心理学者の文献の集中的研究や自己の改革活動への批判の受容と反批判等を含めて——の解明に特に力をいれようとするのもその故である。更に、彼の業績をそれぞれ教育の思想と制度の歴史の中に位置付け、彼の思想と活動の歴史的、現実的意義——彼のライフ・ワークの現代的意義は、当然、その持っている歴史的意義と密接に関連していると私は考える——と、同時にその限界をも検討しようとする所以でもある。

最後に、私のケルシェンシュタイナー研究の基本的立場として、もう一言付け加えておきたい。それは既に述べきたった所からも察せられると思うが、私は、彼の著作や伝記や書簡、また彼の友人やその他の同時代人、例えばシュプランガー (Eduard Spranger, 1882-1963) やフィッシャー (Aloys Fischer, 1880-1937)、ノール (Herman Nohl, 1879-1960)、ヴェーニガー (Erich Weniger, 1894-1961) 等の回想録や追悼文を読むことを通して、ケルシェンシュタイナー自身との「真の出会い」を経験し、彼の教育に対する、並びに世界や人間に対する基本的態度とその基底に横たわる彼の人格そのものに緊密な内面的つながりを感じ、温かい人間的共感すら覚えるに至った。いずれ、本論において人間ケルシェンシュタイナーの全貌は順次明らかにされていくであろうが、私は、彼の78年の生涯が彼の全業績中最も優れた「作品」であり、その「作品」に含まれ、現れている彼の「精神」こそが現代にとって最大の遺産になるであろうという予想に立っている。これは本研究の出発点であるとともに、終着点でもある。

以上要するに、私の研究のテーマと基本的立場を纏めれば、人間ゲオルク・ケルシェンシュタイナーに対する人間的共感を基点にして、彼の思想と活動の総合的な全体像を浮き彫りにするため、彼の教育学がいかなる個人的な「基礎体験」の上に、またいかなる歴史的、社会的背景と教育的現実の下に、どのような成立過程を辿って形成されたか、更にまた、そのようにして形成された彼の教育学がいかなる特質を備え、いかなる歴史的並びに現代的意義を担っているかを明らかにすることにあると言うことができよう。

### 第1部 ケルシェンシュタイナーの前半生——誕生からミュンヘン市視学官になるまで

まず最初に、ケルシェンシュタイナーの前半生の歩みを辿り、彼の生と教育思想との関連を検討することにしよう。残念ながら、今日に至るまで、学問的に基礎付けられたケルシェンシュタイナーの伝記ははまだ見いだされ得ないが、しかし、彼の前半生を知る手掛かりになる伝記としては次の4つがある。すなわち、①彼が1915年に初めて書いた回想記「学校監督官の20年」(Zwanzig Jahre im Schulaufsichtsamt. Ein Rückblick. In: Archiv für Pädagogik. Jg. 3. 1915.), ②1926年に書かれた『自叙伝』(Selbstdarstellung. In: Die Pädagogik der Gegenwart in Selbstdarstellungen, hrsg. von E. Hahn, Bd. I. 1926, —jetzt, Georg Kerschensteiner; Ausgewählte pädagogische Schriften Bd. II. Texte zum pädagogischen Begriff der Arbeit und Arbeitsschule, besorgt von G. Wehle, 1968), ③彼の二度目の妻マリー・ケルシェンシュタイナー (Marie Kerschensteiner, 1870-1954) が、夫の死後、彼女自身の記憶のほかに、集められる限りのあらゆる資料を基に「人間ゲオルク・ケルシェンシュタイナー」を生き生きと描き出した伝記『ゲオルク・ケルシェンシュタイナー——ある学校改革者の生涯』(Georg Kerschensteiner. Der Lebensweg eines Schulreformers. 1939. 3. erw. Anfl., 1957), ④彼の孫娘

——三男ヴォルフガング (Wolfgang Kerscheneister, 1896-1951) の長女——ガブリエル・フェルナウ＝ケルシェンシュタイナー (Gabriele Fernau-Kerscheneister) がいささかジャーナリストティックに書き下ろした『ゲオルク・ケルシェンシュタイナー、すなわち「陶冶の革命」』(Georg Kerscheneister oder “Die Revolution der Bildung”. 1954) がそれである。このほか、ケルシェンシュタイナー自身の他の著作の随所に見られる回顧的叙述や彼を知る人々の回想録、それにさまざまな記録文書などを参照して、記述に万全を記したい。

## 第1章 ケルシェンシュタイナーの誕生と両親の彼への影響

ケルシェンシュタイナーは、1854年7月28日(金曜日)の朝4時、ドイツはバイエルン王国の首都ミュンヘンの中心マリーエンプラッツ (Marienplatz) に程遠からぬタール街 (Tal) 27番地で産声を上げた。だが、教会記録簿 (Kirchenbuch) には7月29日と記入されており——恐らくそれは受洗日であろうと思われる<sup>1)</sup> ——、公式にはこの日が彼の誕生日で通っている。彼が生まれた頃、ミュンヘンは、コレラがまがましい蔓延の最中であつた。「日に100人もの死者が出、黒い霊柩車がひっきりなしに、通りをガタガタ音を立てながら動いていた<sup>2)</sup>」。恐怖が町中を領していたと言つて過言ではない。しかし、幸いなことに、生まれ立ての男の子は、この疫病の魔手から逃れ得たのであつた。彼は、祖父を記念して、ゲオルク・ミヒャエル (Georg Michael) と命名された。

ところで、ケルシェンシュタイナー家の祖先は、15世紀にボヘミア (Böhmen) からオーバープファルツ (Oberpfalz) 地方に移住してきて以来、ニュルンベルク (Nürnberg) とレーゲンスブルク (Regensburg) との間にある小さな村ドイスマウアー (Deusmauer) で農業を営んでいたが、今名前が出たゲオルク・ミヒャエル・ケルシェンシュタイナー (Georg Michael Kerscheneister, 1754-1803) が18世紀の終わりごろ、初めてミュンヘンの近郊、ギージnk (Giesing) ——ここは今日ではミュンヘン市の環状道路 (Ring) の内側に含まれている——に移り住んだ。そして彼の一人息子アントーン (Anton Kerscheneister, 1801-1877) ——その彼は、父の死後、母の再婚相手、ウミンガー (Josef Umminger) のミュンヘン市内にあるチーズ店で働いていた——が、母の遺産——母エリザベート (Elisabeth) は1823年4月21日に亡くなった——で、我々のゲオルクが生まれることになるミュンヘンの中心街の一つタール街27番地に念願の自分の店を借りることができた。アントーンの店は、有名なマリーエンプラッツとイーザル門 (Isartor) を結ぶタール街の、ややイーザル門寄りに位置し、チーズだけではなく、綾織り綿布、綿布、木綿やフランネルといった「反物 (Ellenware)」をも商い、初めのうちは大いに繁盛した<sup>3)</sup>。彼は、26歳でバルバラ・ハルトマイヤー (Maria Barbara Haltmaier, 1803-1850) と結婚し、この結婚によって11人の子宝に恵まれたが、そのうち無事に成人したのは、僅か4人に過ぎなかった。しかし、なかでも、長男のヨーゼフ (Josef Kerscheneister, 1831-1896) は医者となり、後に医学上級参事官 (Obermedizinalrat) 兼枢密顧問官 (Geheimer Rat) に任命され、1881年には貴族——「騎士 (Ritter von Kerscheneister)」の位——に列せられるに至るのである。

アントーンとその家族は、最初、何不自由のない生活を送っていたが、1834年に発足した「ドイツ関税同盟 (Deutscher Zollverein)」とそれに伴う経済的変化が、順調であつた彼らの運命の歯車をすっかり狂わせてしまうことになった。たしかに、ドイツ関税同盟の成立は、ドイツ全体

の産業貿易の面からみれば、歓迎すべき経済上の統一であったかも知れない。だが、それは、当時、経済的に弱体であった南ドイツにとっては大きな打撃であった。すなわち、内国関税の撤廃によって自由になった通商の結果、国内各地の安い商品がどんどんバイエルンに流れ込み、バイエルンの商工業はたちまち窮地に追い込まれたのである。このようなバイエルン全体の危機は、同時にアントーンの店の危機でもあった。商品の値段は、激しい競争のためにどんどん下がり、以前と同じだけ商品が売れても一日の売り上げ高、従ってまた儲けも、次第に下降線を辿らざるを得なかった。そこで、アントーンは、この「収入の減損を補うために<sup>4)</sup>」、何かよい副業はないものかと思案にくれる。

たまたま、丁度売りに出ていた染色工場付きの屋敷が見つかり、彼はそれを買って手持ちの現金全部をつぎ込み、屋敷の整備を行った。彼の計画によれば、染色工場は他人に貸し、反物とチーズの店と新たに洗濯物などを圧搾ローラで仕上げる店 (Mange) を開く予定であった。そうすることによって、彼は賃貸料を得るのみならず、これまで払っていた店代と家賃を節約することができる考えたのである。ところが、その家の登記が終わらないうちに、売り手が死亡し、不幸にしてアントーンは、遺産相続争いの真只中に巻き込まれてしまう。その争いは、その後延々6年間も続き、勇躍実行に移し始めた彼の事業計画を水泡に帰せしめるのである。

しかも、こうした不運にあって、尾羽打ち枯らし悄然としている彼に、またもや大きな不幸が見舞う。1850年8月27日、長年連れ添ってきた妻バルバラに先だたれるのである。落ち目の人間に対して、運命は何と非情冷酷なのであろうか。1年余り完全に打ちひしがれて、何ら為すところを知らなかったアントーンも、しかし、「このままでは駄目だ」と一念発起し、まずは自らの傍らにより強い性格の伴侶が必要だと、後妻を探し求める。既に50の坂を越し、それも地位や名声に恵まれた男ならいざ知らず、借金で首が回らない彼に、誰が好き好んで労苦をともにしてくれるであろうか。しかしながら、「この度は、運命が彼に好意を持ってくれたのであった<sup>5)</sup>」。アントーンの再婚の相手はカタリーナ・カール (Katharina Karl, 1833-1895) と言い、何と当時まだ18歳の孤児であった。二人は、1852年5月11日、ミュンヘンの聖霊教会 (Heilig-Geist-Kirche) で結婚式を挙げた。アントーンは51歳、長男ヨーゼフは既に医学生であり、継母より2歳年上になっていた。

カタリーナは、1833年6月7日、ドナウ河畔のノイブルク (Neuburg) でビール醸造人の5番目の子として生まれた。彼女は、父フランツ (Franz Sales Karl, 1804-1834) を生後9カ月、母ヨーゼファ (Josepha Karl, geb. Böck, 1807-1842) を8歳で失い<sup>6)</sup>、その後遠い親戚に当たるフライジング (Freising) のビール醸造人シュミートマイヤー (Schmiedmeyer) の許に引き取られた。養父母はカタリーナの面倒を非常によく見、また彼女を「永福童貞マリア修道女会 (die Englischen Fräulein)」の学校に送って教育を受けさせた。だが、このような厚遇にもかかわらず、彼女は、「養父母の愛には、外からは与えられないもの、つまり、自然が親と子どもの間に置いた譲渡できない結び付きが欠けているのを感じた。彼女は、とりわけ、彼女の手を取って、生涯保護し、導いてくれる『父親』に憧れていた<sup>7)</sup>」。既に頭や髭に白いものが混じり始めたアントーンが彼女に結婚を申し込んだ時、まさにその白髪故に、彼は、彼女に「父親」を想起させ、信頼感を与えた。従って、彼女は、養父母がこの不釣り合いな結婚に猛反対したにもかかわらず、我意を通して、アントーンの許に嫁いだのであった。養父母は、彼女の「我儘」に怒り、

以後「彼らの援助の手を引っ込め、持参金も与える予定にしていた半分しか与えなかった<sup>8)</sup>」。

カタリーナの結婚生活は、たしかに客観的には、苦悩と心配事の満ちる中で始まり、「生涯、心配なく父親に似た男性の手に導かれない<sup>9)</sup>」という彼女の乙女らしい期待も早々に裏切られる運命にあるのだが、しかし、陽気で、生気に溢れた彼女にとっては「いつかはきっと良くなるだろう」という楽観に支えられて、普通の人になら不幸と感じられることにさえさほどつらさを感じなかった。最初に授かった女の子——その子は、ローザ (Rosa) と命名された——が誕生後間もなく身罷ったのも、彼女の内奥の本質を人生の荒波によって鍛え、完成させるための激しい試練の一つであった。暫らくして、カタリーナは、再び懐妊した。そして生まれたのが他ならぬゲオルクであった。カタリーナ21歳、アントーン53歳のことである。

ゲオルクの誕生は、しかし、ガブリエル・フェルナウ＝ケルシェンシュタイナーも言うように、ケルシェンシュタイナー家が「最もひどく零落した時期に当たっていた<sup>10)</sup>」。すなわち、彼が生まれて1月たつたたないうちに、父アントーンは、長い遺産相続争いの末、結局、その家屋敷が競売に付されることになり、生涯かかって築き上げて来た全財産をことごとく失ってしまった。かくして、家族は、文字通り路頭に迷い、マリーエンガスル (Mariengäßl) に安い家賃の住まいを見つけるまで、二、三日裏庭に藁を敷いて野宿しなければならなかった。探し出された住居というのも、窓はすべて荒涼とした中庭に面しており、陽の光は夏でも差し込むことがなかったし、リビングキッチンほかに、小さな部屋が一つあるだけであった。アントーンは職を求めて、1854年9月21日付けを皮切りに、1861年まで、少なくとも9回以上、時のミュンヘン市長シュタインズドルフ (Steinsdorf) にどんなささやかな職でも良い、市で自分を雇ってくれるよう請願書を出し続けるが、しかし、すべて「不問に付 (ad acta)」される<sup>11)</sup>。元来弱い性格であったアントーンは、こうした悲惨な運命に完全に挫けてしまい、悲しみにやつれて殆ど家に座りきりの状態であった。そんな時、またもや弟のアントーン・ヨーゼフ (Anton Josef Kerschensteiner, 1857-1920) が生まれた (1857年9月4日)。だが、一家の支柱たるべき父親がこのような有様では、彼の家族、わけても幼い二人の兄弟の将来はどうなることであろうか。

しかし、我々は、まだ、ここにカタリーナがいることを忘れてはならない。彼女は、アントーンに代わって一家の苦勞を一手に引き受け、朝暗いうちから夜更けまで「ソーセージ用煮鍋 (Wurstkessel)」を乗せた荷車を引いて、近くの市場や霊場に赴いたのである。マリー・ケルシェンシュタイナーは、困窮の中にあって愚痴一つこぼさず、また「決して落胆せず、いつまでも朗らかで活動的な<sup>12)</sup>」カタリーナの姿を感動的に描いているので、少し長くなるが、引用しておこう。「彼女は、運命が彼女を屈服させること深ければ深い程、それだけ大きな力で立ち上がって行く人間の一人であった。彼女の性格は、夫のそれよりも遅しかった。彼女は、不幸に対処するに、60歳に程近いアントーンより消耗していない神経を持っていた。彼女は、今こそ運命に向かって飛びかかっていくことが必要であると気付いた。そして、彼女は、ただ男子のみが自己の運命を引き受ける時によくするような決然たる態度で、必要なことをした。紅潮した頬をふくらませて、小さなベットに安らかに眠っている二人の男の子を見るにつけ、彼女は、この幸福を決してゆるがしてはならないことを知った。夫は、その性格上、戦いの手斧を振り上げることができなかったけれども、カタリーナは、この二人の男の子の幼年時代を決して貧困の影によって曇らせないよう、戦うことの荒々しい喜びに襲われたのであった。彼女は、暫らく子どもの世話を

夫に任せ、彼女自身一家の扶養者 (Ernährerin) の役割を引き受けた。彼女は、偶然出くわした仕事について。彼女は、オーバーバイエルンの市場や、また、たとえそこがどんなに遠く離れていようとも、方々の霊場に荷車を引いて出かけた。その場所に適当な時間に着けるように、夜明け前に家を出、夜も更けてやっとな家に帰るのであった。そのような仕事自分が自分にふさわしいものであるかどうかは、ごうも彼女の気にならなかった。肝心なことは、家族が次の日を不自由なく迎え得るように、彼女が十分なお金を家に持ち帰ることであった。戦いは厳しかった。しかし、彼女は子どもたちにはほほえみかけると、すぐに再び身も心も慰められるのであった<sup>13)</sup>。カタリーナはまた、行く先々で、我が子のために昔話やお伽話を仕入れて来ては話して聞かせたという。こんなに忍耐強く、かつ愛情溢れる素晴らしい母親を持ち得た子どもたちは、どんなにか幸せであったことであろう。「子どもたちにとって彼女は天使 (Engel) のように思えた<sup>14)</sup>」というガブリエレ・フェルナウ＝ケルシェンシュタイナーの言葉も決して誇張ではない。

しかも、カタリーナの我が子への愛情は、盲目的な愛ではなかった。かつてペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827) は、母性愛を「自然の全秩序のうちで最も優しくして同時に最も猛い力<sup>15)</sup>」と呼び、子どもの初期の教育における「最も有力な動力」・「本源的動機<sup>16)</sup>」とみなしたのであるが、しかし、その彼は、母性愛を単に「できるだけ強く働かせ」るだけでなく、これを「思慮によって…調節すること」、つまり「思慮深い愛 (a thinking love)<sup>17)</sup>」にまで高めることを母親に要求したのであった。カタリーナの愛情には、彼女の賢明さと篤信の故に、おのずからペスタロッチの要請するものが備わっていたと言えよう。たしかに、彼女が子どもたちと接触する時間はごく限られたものであったが、しかし、子どもたちと一緒にいることのできる間は、「太った人は穏やかだ (Dicke Leute sind gemütlich)」とのドイツの俗諺通り——彼女の体重は当時既に90kgあり、最終的には150kgにも達したという<sup>18)</sup>——実におおらかで、しかも「思慮深い」愛情と配慮で埋め尽くすことができたのである。このように、心底から善良で、愛情深いカタリーナは、子どもたちにとって、文字通り、理想の母親であり、かつ理想の教育者であった。彼らは、たとえ一家の暮らしは不如意であっても、せめて子どもたちには貧困の惨めさを味わわせたくないと懸命に働く母親の姿をつぶさにみて、幼い時から既に「働くことは、真面目な生活を送る上に当然のことであり、お金は尊重すべき品物であることを学んだ<sup>19)</sup>」。72歳のゲオルクが、自らの生涯を回顧して自叙伝を書いた時、なお忘れ難い追憶として彼のまぶたの底に焼き付いていたのは、「一家が困窮に陥った時、彼女に任された家族のために、いやそれどころか更に、彼女の許にきた他の労する者、重荷を負う者のためにすらパンを与えるのに、…いかなる労働も低過ぎることなく、いかなる道も遠過ぎることなく、いかなる苦勞もつら過ぎることはなかった」母カタリーナの献身的な姿であった。彼は、そんな思い出を残してくれた母に「有難いと思う<sup>20)</sup>」と述べて、感謝の気持ちを捧げている。

こうして、幼いゲオルクは、ノールが指摘するように、この素晴らしい母を通して、「家庭の教育的価値を経験したのであり、他人に対する配慮 (Fürsorge um andere) を学んだ<sup>21)</sup>」のであった。ケルシェンシュタイナーが後年に至って、労作の、そしてペスタロッチの「居間の教育 (Erziehung der Wohnstube)」の教育的意義を強調し、女子の「自然の天職 (natürlicher Beruf)」への教育の重要性を力説する時、彼の立言の根底には、以上のような幼児期の「基礎体験」が横たわっていたのである。

このほか、精神的素質や気質の面でも、ケルシェンシュタイナーが母カタリーナから贈られたものには、すこぶる大きいものがあった。彼は、自叙伝で、母の性質を説明して、「善良であること (gütig)、いつも朗らかであること (immer heiter)、敬虔であること (fromm)、決然とした態度をとること (entschlossen)、これが彼女の特性であった<sup>23)</sup>」と書いているが、このような母の特性が、そっくりそのまま彼自身の特性になっていたことは、多くの資料が立証している。なかでも「いつまでも朗らかなユーモア (der ewig heitere Humor)」は「私の愛する母から受け継いだ神聖な遺産<sup>24)</sup>」であったとは、ケルシェンシュタイナー自身の言葉であるし、同時に彼の弟アントーンの証言<sup>25)</sup>でもある。この母親譲りの明朗、快活、陽気な性質をゲオルクは生涯持ち続けたのであった。このことは、シュプランガーがケルシェンシュタイナーに対する追悼演説において、彼は「いつも若々しい、快活な性質 (die immer jugendliche, frohe Natur)」を、「大はしゃぎの快活さ、陽気さ (der ausgelassene Frohsinn)<sup>26)</sup>」を持っていたと回想していることから明らかである。いずれにせよ、母カタリーナはあらゆる面でケルシェンシュタイナーの人間形成に決定的な影響を与えたと言えよう。

しかし、反面、父アントーンからの贈りものもなかった訳ではない。既述の通り、彼は、ゲオルクが生まれたころには、長年にわたって営々として築き上げた全財産を失い、また一家の中心として家族を養って行くに十分な別の職を見つけることもできず、妻に一家の扶養をゆだねねばならない自責の念にさいなまれる弱い男になっていたが、本来極めて激しい気性の持ち主であった。もちろん、その痕跡は依然として残っていて、ゲオルクにとって父は、母程寛大ではなかった。腕白なゲオルクは、よく父親の逆鱗に触れ、容赦なく殴りつけられる目にしばしば会った。彼の孫娘フェルナウ＝ケルシェンシュタイナーは、祖父の伝記を「彼は多くの平手打ちを受け、また多くの平手打ちを与えた<sup>27)</sup>」という文章で始めているが、事実、彼は、ギムナジウムの教師時代、生徒に対しても横つらを張ることを辞さなかった。彼のこのような「激しい怒りっぽさ」と「気の短さ<sup>28)</sup>」は、言うまでもなく、父アントーンからの遺伝であった。更に、アントーンは、真正直で、曲がったことの嫌いな人であった。従って彼は、商人には似ず、必ずしも愛想がよい方とは言えなかったし、対人関係でもスマートに振る舞うことができなかった。ゲオルクもまた、多分に父親の「実直さ、厳格さ、それに妥協のなさ<sup>29)</sup>」を顔かち持っていたが、しかし、年齢を重ねるにつれて、いつも忍耐強く、寛大で、愛情に溢れていた母親を思い出して、ややもすれば短気を起こし、激情に駆られて非妥協的な態度に走り勝ちな自分を抑え得たのであった。ここに、彼の内面における両親からの遺伝の葛藤を見ることができる。

次に、両親からの遺伝要素の調和状態を示す例を掲げておこう。それは彼の芸術家的素質である。父アントーンは、手先が器用で、芸術的才能を豊かに備えていた。マリー・ケルシェンシュタイナーの伝えるところによれば、彼は、時と事情が許す限り、いろいろな工作をするのが好きであった。ある年、彼はキリスト降誕の既の情景を模した立体模型 (Weihnachtskrippe) を製作したが、その仕上がり具合が素人離れた巧妙なもので、彼の作品の評判が当時のバイエルン王マクシミリアン2世 (König Maximilian II. Josef, 在位 1848-1864) の妃マリー (Marie Königin von Bayern, 1825-1889) の耳まで届き、彼の家までわざわざのお目見得を賜ったという。それ故、アントーンは、このキリスト降誕の立体模型に非常に大きな愛着を抱き、破産後あらゆる金目のものを人に譲り渡さなければならなくなった時でも、手放すことを拒んだ唯一のもので

あった<sup>30)</sup>。こうした父の芸術的才能が息子ゲオルクの血の中に受け継がれたとしても別に不思議ではない。8歳になって、ゲオルクは、アントン・フィルザー (Anton Filser) という老教師がフェルバーグラベン (Färbergraben) 街に開いている面塾に週2回、水曜と土曜の午後に通い、非常な熱心さで絵の手解きを受けたが、それによって彼の芸術的衝動が目覚まされたのであろう——マリー・ケルシェンシュタイナーはこう書いている。「図画の授業ではフィルザー先生は、教育的な策略を用いて水銀のようにちっとも落ち着きのない腕白小僧 (der quecksilbrige Bub-en) の興味を惹いておこうとする必要はなかった<sup>31)</sup>」と。——、その後も彼は、ギムナジウムの生徒時代と教師時代に水彩画の指導を受け、めきめき腕を上げて素人の域はとうに脱し、かのゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) やヘッセ (Hermann Hesse, 1877-1962) がそうであったように、生涯水彩画を描くことを趣味の一つとし得たのであった。また、ケルシェンシュタイナーが大学時代、全く専門外の「造形美術に関する講義の聴講に熱心に通って<sup>32)</sup>」いたことも、彼の美術に対する関心の並々ならぬことを物語っていると見えよう。だが、彼の趣味は、単に絵画の領域だけに止まらず、音楽の領域、とりわけ、美しい声で歌い、ピアノやバイオリンを弾くことにも及んだ。教職準備学校 (Präparandenschule) 在学時代、彼はフライジnkの大聖堂合唱隊 (Domchor) でボーイ・ソプラノを響かせていたし、苦学生のころは、ピアノと歌の家庭教師として生計を支えた。大学時代彼は、ピアノの練習を規則的に続けるとともに、二人のリヒャルト、すなわちリヒャルト・シュトラウス (Richard Strauss, 1864-1949) とリヒャルト・ワグナー (Richard Wagner, 1813-1883) の音楽に心酔する<sup>33)</sup>。ところで、このような彼の音楽の才能は、どうやら、母の方からの遺伝であるようだ。カタリーナは、いつも陽気に歌を口ずさみ、そして、一かどの音楽愛好家でもあった。そのことは、既に大学生になっていた息子ゲオルクの美しいピアノ演奏が自慢で、また彼女自身手近に音楽が聞きたくて、苦しい家計の中から工面して、中古ピアノ——それは350マルクもしたノ——を買い求め、二人の息子——弟アントンはフルートを演奏した——とその友人たちのアンサンブルを楽しんでいた<sup>34)</sup> ことから窺える。かくして、ゲオルク・ケルシェンシュタイナーの本性に宿る、絶えず美的なものに惹きつけられる鋭敏な感性は、両親からのうるわしい贈り物であったとすることができよう。そして、彼のこのような芸術家的天分は、彼をして一個の「美的人間 (der ästhetische Mensch)」に形成せしめたのみならず、後年「芸術教育運動 (Kunsterziehungsbewegung)」に対する彼の態度決定や子どもの絵画能力の発達に関する研究に靈感を与える役割を担う筈のものであった。

## 第2章 幼少年期のケルシェンシュタイナー

家庭の貧困にもかかわらず、母親の必死の頑張りのお陰で、ゲオルクは、弟アントンとともに何の苦勞も感じず、のびのびと成長した。しかし、彼ら自身もまた、既に幼い頃から、求めるところの少ない、健気な子どもでもあった。彼らは、ただ自由さえ制限されなければ、また好物のレバー入り団子 (Leberknödel) と蒸し団子 (Dampfnudel) をたらふく食べることもさえ拒まれなければ、それで満足し得たのであった。その代わり、自由の愛好者ゲオルクの腕白は相当な代物であったようである。彼は、後年、自作の愉快な詩に彼の子どもころの思い出の一駒を次のように描いている。

「年一年と年がたち、  
乳飲み子が童になった時、  
その彼は、腕白小僧の誉れとなる  
あらゆる徳を備えていた。  
近所の人からは林檎を失敬し、  
我らの神たる父親からは  
毎日気持ちよく煙草をくすねた。  
彼にとって登るに高過ぎる木は、  
一本もなく、  
泳ぐに深過ぎる川とてなかった。」<sup>1)</sup>

ところで、この詩で触れられている林檎窃盗事件は、ゲオルク8歳の時、実際に起こったもので、たしかに、誰にも大なり小なり経験のある少年時代のたわいのない悪戯ではあるが、しかし後々まで彼の心に苦い思い出を残した一大痛恨事であった。それはこんな風にして起こったのである。イーザル門の前に、当時建築半ばで荒れるに任せたままになっていた家があり、近所の悪童どもの格好の遊び場になっていた。うまい具合に、そこには、竈を作るに十分な程の煉瓦まで放置されていた。古今東西を問わず、腕白坊主にとっては、母親から分け与えられるものを一人で食べるよりは、こっそり盗んで、仲間と一緒に食べる方が美味しく、スリルに富んだものであることは言うまでもない。幼いゲオルクと友人たちは、ある日、近くの食料品市場ヴィクトゥアリーエンマルクト（Viktualienmarkt）から林檎を盗んで来て、それを竈で焼いて食べようと思い立った。早速計画は実行に移され、首尾よく林檎は彼らの手に入った。しかし、惜しくも、もう少しのところまで彼らの口には入らなかった。丁度林檎が焼けて芳香を放ち始めた時、立ち昇る煙を見つけて警官が踏み込んできたからである。他の悪童たちは、素早く逃げたが、しかし、焼けた林檎をズボンのポケットに押し込んで逃げようとしたゲオルク一人が捕まった。そして彼は、「集団窃盗（Bandendiebstahl）」と「放火（Brandstiftung）」<sup>2)</sup>の罪で一夜を留置所で過ごす必要がなかった。その夜、彼は、留置所の暗闇の中で、しかも同室の二人の放浪者にまでからかわれ、どれ程の恥辱と絶望と後悔の念にさいなまれたか、想像に余りある。後に、帝国議会議員（Reichstagsabgeordnete）となった彼は、刑事責任を負うべき「刑法上の成年（Strafmündigkeit）」を14歳まで引き上げることを支持する演説を、この事件の例を挙げながら情熱を込めて行ったという<sup>3)</sup>。

ゲオルクに腕白と同時に学習の舞台を提供したのは、タール街であり、イーザル川畔であった。彼は、市の立つ日には、イーザル門から当時のマルクトプラッツ——今日のマリーエンプラッツ——まで続く車の列を飽かず眺め、好奇心を満足させることができたし、そうでない日は、通りに面したパン屋や鍛冶屋、桶屋や指物師などの店を覗き、彼らの仕事振りを見覚えることができた。だが、彼が最も気に入ったのは、サラサラと音を立てて流れるイーザル川の畔か、川に無数に浮かんでいる筏の上で遊ぶことであった。こうした戸外での自由な生活や遊びが、彼に観察と発見と試行の機会をもとより、「極めて冒険的な体操の練習をする機会<sup>4)</sup>」をも無数に与えたことは指摘するまでもない。1908年、ケルシェンシュタイナーの名を一躍世界的なものにするチュ

ーリヒでの「ペスタロッチ生誕162年記念祭」での記念講演「ペスタロッチの精神における未来の学校」(Die Schule der Zukunft im Geiste Pestalozzis)——これは後に、新聞・雑誌に掲載されるに際し、「未来の学校、それは労作学校である」(Die Schule der Zukunft, eine Arbeitsschule)と改題された——において彼は、子どもの本質を「労作すること (Arbeiten), 創造すること (Schaffen), 運動すること (Bewegen), 試行すること (Probieren), 経験すること (Erfahren), 体験すること (Erleben) であり、絶えず現実を媒介にして学ぶこと (im Medium der Wirklichkeit zu lernen) である<sup>6)</sup>」と語ったのであるが、そのような生き生きとした活動性と現実を媒介としての豊かな学習によって特徴付けられた子どもの姿は、そのままケルシェンシュタイナー自身の幼少期の忠実な描写にもなっていると言える。

さて、6歳になって、近くの聖霊教会付属学校 (Heilig-Geist-Pfarrschule) へ通学することになったゲオルクは、今見たように、戸外での活動的な生活に慣れ切っていたので、毎時間毎時間机の前に正座して、先生の話に耳を傾けなければならない新しい生活に耐えることができなかった。学校では、これまで彼の心を捉えて放さなかったような魅力ある世界がすべて消え去り、勢い彼の思いは、タール街やイーザル川畔へ飛ぶ。しかし、それも東の間、彼は、担任のグループ (Simon Graeff) 先生の質問にあわてて我に帰らざるを得なかった。前述の同じ講演で、次のように描かれている学校の現実と子どもの世界の現実とのギャップは、少年ゲオルクがほぼ50年前、実際に体験したのもでもあったのである。すなわち、学校に入学すると、「子どもの世界は、一つ残らず消え失せる。代わって、多数の謎に満ち、理解し難い要求や目的を持った新しい、よそよそしい世界が彼らの前に立っている。砂山、積木箱、鉄、金棺、鞭に代わって——黒板、石筆、初等読本 (Fibel)、定規が。愉快なおしゃべりや作り話をすることに代わって——沈黙と傾聴が。空想の世界でいるんなことに思いを馳せる代わりに——注意を払い、精神を集中することが。発見したり、ためしたり、試みにやってみたり、作り出したりする (Entdecken, Versuchen, Probieren, Produzieren) 代わりに——模倣することが。大通りや路地を楽しく駆け回る代わりに——静かに座り、じっとしていることが<sup>6)</sup>」。

こうした「学習学校 (Lernschule)」・「書物学校 (Buchschule)」の叙述を行う時、必ずやケルシェンシュタイナーは、彼自身の幼時の苦い体験を思い起こしていたに相違ない。古い学校の体質にうまく順応することのできなかったゲオルクに対して、担任教師は、彼の成績証明書に、「遊ぶことが好きだ (Spielt gern!)」とか、「かなり不注意だ (Ziemlich unaufmerksam!)」とか、「ともかく、ほんやりするな (Nur nicht zerstreut!)<sup>7)</sup>」とかいった余り芳しくない文字を書き記さざるを得なかったのである。

そこで、父親アントーンは、業を煮やし、ゲオルクを厳しく訓戒もし、また彼の生活への監視の目を強めた。晩年、ゲオルクはこう書いている。「私は、学校の宿題をいつも非常に早く、それも事情が許すよりずっと早く仕上げてしまった。しかし、私の父は、この宿題の処理の仕方に癒し難い反感を抱いた。彼は、国民学校の教師が我々に課した日曜日の宿題をいとも厳格に査察した。もしそれが十分慎重に片付けられていなかったならば、彼は、それを容赦なく引き裂いてしまった。同様に彼は、秩序 (Ordnung)、几帳面 (Pünktlichkeit)、服従 (Gehorsam) に厳しく固執した。このため、私は、十分しばしば藤の鞭と非常に親しい知り合いになった。彼はまた、私の子どもらしい答えにおいても明確に熟考することを重視した<sup>8)</sup>」と。

絶望した担任教師の方でも、ゲオルクの「水銀のようにちっとも落ち着きのない活発さ (queksilbrige Lebhaftigkeit)<sup>9)</sup>」を何とか抑えることができないものかと、彼に一種の「賄賂 (bribe)<sup>10)</sup>」を与えることにした。すなわち、もし彼が丸3日間静かに椅子に座っていることができたなら、彼に学校賞 (Schulpreis) を授与することを約束したのである。当時、学校から賞を受けられるということは、極めて名誉なことであった。そのことは、授与式が旧市庁舎のホールのような荘厳な場所で、しかも学校の全教師は言うまでもなく、司祭や市のお偉方の臨席のもと、盛大厳粛に執り行われたことから明らかである。ゲオルクにも、このような晴れがましい賞を市のお歴々の前で、そしてとりわけ父親の前で受けるということは、とても素晴らしい、幸せなことに思えた。彼は、努力して挑戦してみようと決心した。2日間はとにかく成功した。しかし、彼の善意志にもかかわらず、静かにじっと座っていることは、彼の活発な本性にそぐわなかった。3日目ついに、彼は耐えられなくなった。かくして、彼の目覚め始めた功名心もはかなくついえたかに見えた。だが、子ども好きのグレーフ先生は、それにもかかわらず、ゲオルクを受賞者の中に——3等賞として——加えてくれたのである。晴れの式典の日、彼の眼は、会場のどこかにいるであろう父親アントーンを探し求めた。そしてその細面の顔に嬉しそうな表情を見いだした時、彼の心は、幸せで一杯になった。この時、彼の小さな胸の中にも何か期するものが芽生えたのかもしれない。高みを目指してどこまでも努力し続けようとする功名心 (Ehrgeiz) は、彼の生涯を貫く基本的姿勢となる。

そのほかのケルシェンシュタイナーの幼少年期の体験のうちで、書き落とすことのできないものを幾つか付け加えるとすれば、一つは、彼の7歳に始まり、飽きることなく続けられた読書の習慣<sup>11)</sup>についてである。ゲオルクの国民学校時代には、幸いにも、一家の経済状態に徐々に好転の兆しが見られ始めた——彼7歳半の時、父アントーンは漸く「領邦議会の使い走り (Landtagsbote)」の職を得、議会の開かれている時 (主に11月) だけ臨時に雇われることになり、また母カテリーナの商売も次第に軌道に乗って、イーザル門のすぐ傍の52番地に小さなチーズ店を開くことができるまでになった——とはいえ、両親にはゲオルクに書物を買って与えるだけの余裕はまだなかったのである。従って、彼は、彼の手に入る「可能な限りの印刷物をすべて幅広く読むこと<sup>12)</sup>」以外に彼の旺盛な読書欲を満足させるものを何も持ち得なかった。彼にとって最も容易に手に入る印刷物となったのは、店で包み紙として使われている「ライプチヒ絵入り新聞 (Leipziger Illustrierte Zeitung)」であり、彼はそれを貪り読んだのはもちろん、それから材料を取って人形芝居の脚本を書き下ろしたりした。ほかに、彼が愛読していた読み物としては、「ミュンヘン絵草紙 (Münchener Bilderbogen)」——これは読んだ後、切り抜かれ、彼と弟で上演する人形芝居の登場人物や書き割りに使われた——、それに、イギリスの作家デフォー (Daniel Defoe, 1660-1731) の有名な冒険小説『ロビンソン・クルーソー』 (Robinson Crusoe, 1719) やアメリカの作家クーパー (James Fenimore Cooper, 1789-1851) の開拓者やインディアンの活躍する『レザー・ストッキング物語』 (Lederstrumpf-Erzählungen, 1823-1841) ——これらは既にドイツ語訳が出され、青少年向きの図書として人気があった——などが挙げられる<sup>13)</sup>。もとより、このような彼の読書傾向にとりたてて特記すべきものは何一つ認められない——というのも、それが健康な少年にふさわしい夢と空想をかきたてる冒険譚であるから——にしても、海後宗臣 (1901-1987) が指摘しているように、少なくとも「彼が少年時代より読書や創作に可成りの興味

と才能を示していた<sup>14)</sup>」ことだけは窺い知ることができるであろう。自叙伝に書かれている次のエピソードは、やっと気に入った本を手にした時の少年ゲオルクの得意満面の有様を彷彿させて、いかにもほほえましい。「私がなかなか魅力のある書物をうまく手に入れた時には、私は古いアイロン用じゅうたん (Bügelteppich) を肩から吊し、居間の壁沿いに置いてある三つの箆筒の上に、説教者のように大声で読みながら、あちこち歩き回った。そして、その本の最も素晴らしい箇所を、顔にほほえみを浮かべて窓際に座り、私の破れたズボンや靴下やシャツを繕っている母に読んで聞かせた<sup>15)</sup>」。彼の生涯続く文芸への愛好心は、このようにして培われ、強められたのである。

最後に、今一つ書き加えておかなければならないのは、少年ゲオルクの敬虔な心情を助成した家庭の宗教的雰囲気についてである。両親は「厳格に信仰を守る (strenggläubig)<sup>16)</sup>」カトリック信者であり、二人の男の子を毎日曜日、規則正しく礼拝に連れていくことを怠らなかった。また教会から帰り、宿題を済ませた後、既述のキリスト降誕の立体模型とともに、ケルシェンシュタイナー家の家宝に属する、当時有名だった画家ヴォルツ (Johann Michael Voltz, 1774-1858) の立派な挿画の入った大きな部厚い福音書から、金文字で書かれた福音書抜粋章句とそれに続く普通の黒文字で印刷された考察を朗読することも、ゲオルクの日曜日の欠かせない課題であった。父アントーンは、少なくとも年に一度は息子二人を連れて、ミュンヘンの西南プラーネク (Planegg) の近くにある霊場教会 (Wallfahrtskirche) マリア・アイヒ (Maria Eich) に参詣することを常としていた。この日は、森や草原の中を突切ってどンドン歩き、プフェッフアーケーヘン (Pfefferkuchen) ——蜂蜜・胡椒入りのケーキ——などに舌鼓を打つことができたので、子どもたちにとってはまるで祝祭日と同じように感じられた。こうして信心深い両親によって幼少時代から育まれてきたゲオルクの素朴で敬虔なカトリック信仰は、成程ギムナジウムや大学の学生時代から動揺をきたし始め、その後、生の証しとなるべき真の信仰を求めての彼の懸命の努力にもかかわらず、ついに最後までカトリック教会との真の関係を再び見いだすことができなかったが、しかし、それは、姿を変えて彼の溢れんばかりの宗教的情操として、また人間の内なる善に対する無条件の信頼や永遠の価値に対する畏敬として受け継がれていったと見ることができよう。

### 第3章 師範学校時代のケルシェンシュタイナー

我々のゲオルクが、今や12歳にまで成長し、当時の領邦の学校法の規定に従い、国民学校の就学義務を果たすことになった。しかし、その当の本人は、自ら告白しているように、「人生に対する決断を必要とするところに、何かある特定の職業に対して特別の関心や好みを全然抱いていなかった<sup>17)</sup>」のである。フェルナウ＝ケルシェンシュタイナーは、国民学校時代のゲオルク少年は、「特に行儀の良い方でもなく、特に腕白でもなく、また、特に賢くもなければ、馬鹿でもない<sup>18)</sup>」、つまりこれと言って目立った特徴のない子どもであったと言うが、彼が後にミュンヘン市の視学官となって、母校の関係者から見せられた昔の成績表には、「聡明な、しかし、ひどくやんちゃな男の子 (Ein intelligenter, doch sehr übermütiger Knabe)<sup>19)</sup>」と書かれていた。成程、学校の成績そのものは、特に優れているという程のことはなかったにしても、とにかく頭脳は明晰であったに違いない。そこで、両親は、何とか息子の才能を伸ばし、彼の将来を激しい人生の波風から免れさせてやりたいと願い、家族の古くからの親切な相談相手であった、当時の「司教座教会参事会会員 (Domkapitular)」、後のパッサウ司教 (Bischof von Passau)、ランプフ

(Michael von Rampf, 1824-1901) 博士に助言を求めた。博士は、ゲオルクに何冊かの青少年向きの書物を読ませ、そのうちの一、二冊について自分の言葉で書き直させた。これを読んで、博士は、恐らくゲオルクの才能を認めたのであろう、彼をベネディクト会修道院の神学校へ入れ、カトリックの聖職者にするよう両親に提案したのである。もし彼がその提案に素直に従うことになれば、両親はその後、彼の教育にかかる一切の財政的負担を免れることになったであろう。しかし、彼は、幼時から、聖職者と警官に対し子どもらしい尊敬の念を抱いていたにもかかわらず、それを断ったのである。しかも、その拒否の理由が、奮っている。彼は、ランプフ博士に向かって、「そこで何年位勉強しなければならないのですか (Wie lange muß man da lernen?)」と尋ねた。すると、「12年 (Zwölf Jahre)」という答えが返ってきた<sup>4)</sup>。それで、彼は聖職者になることを拒んだのである。つまり、彼には「生徒用腰掛けに12年間も座っていることは、堪え難く思われた<sup>5)</sup>」からである。

これとほぼ同じ理由で、彼は、そのころ既にアウクスブルク (Augsburg) の地方医官 (Bezirkarzt) として勤務していた長兄ヨーゼフから紹介されたケルン (Köln) の大商店での徒弟の口も拒絶する。「私は一日中その事務所で座っていなければならないのですか」——これが、ゲオルクの発した大商人への質問である。「多分初めの6ないし8年間は<sup>6)</sup>」という答えに、彼はケルン行きを拒否した。これらのエピソードは、そのころの彼がいかにじっと座っていること——それは彼にとって、学校特有の雰囲気の意味した——の嫌いな、活動的な少年であったかを如実に物語っている。だが、座っていることができるだけ少なく、しかも家庭の「経済的困窮<sup>7)</sup>」のため、職業につくまでの修業に余り多くの費用のかからない、しかるべき職業などというものが果たして存在するのだろうか。ランプフ博士は教職 (Lehrerberuf) を思いついた。ゲオルクは「5年だけ勉強すればよい<sup>8)</sup>」と聞いて、ただそれだけの理由で承諾したのである。後年、彼は、『自叙伝』において、「もっと短い修業期間でも満足したであろう<sup>9)</sup>」とさえ書いている。

そんな訳で、ケルシェンシュタイナーが国民学校教師への修業の道に踏み込むに際して、そこに教職に対する内的動機など全然見いだすことができない。しかし、私は、彼の教職選択の動機を不純だとか、ドライだとか言っ、責める気にもならない。なぜなら、国民学校を卒業しての12歳の子どもに「教職への何らかの傾向性ないし関心 (irgendeine Neigung oder ein Interesse am pädagogischen Beruf)<sup>10)</sup>」や教育的責任の自覚、更には彼が後に要求した「教師への内面的使命観 (innere Berufenheit zum Lehrer)」といったものを期待するのは、無理な注文だと思うからである。事実、彼自身も、恐らく自己の経験を想起してのことであろう、このような「究極にして最高の意味を理解する力は、職業選択をするところにはまだ稀にしか発達しないで、もっと後になってから初めて発達する<sup>11)</sup>」と、彼の有名な教師論で認めている。いずれにせよ、少年ゲオルクは、マリー・ケルシェンシュタイナーが言っているように、彼を「後にドイツ民族のために尽くさせることになる軌道に導く運命のぼんやりした予感<sup>12)</sup>」すら持たず、国民学校教師への道こそ自分にとって「独り立ちへの最も近道である<sup>13)</sup>」という健気な思いだけで、教職への道を歩むことにしたのである。ランプフ博士がミュンヘン郊外のフライジック——それは彼の母が育ち、学んだ町でもあった——に新設されたばかりの王立師範学校 (Königliches Lehrerseminar) に推薦状を書いてくれ、ケルシェンシュタイナーはめでたく入学を許可された。

1866年のある秋の日の朝、彼は、入学に際して持参するよう指定されたもの、すなわち「ピア

ノ——但し、生徒が所有している場合——、バイオリン、シルクハット、黒っぽいひさしのある帽子各1個、シャツ6着、ズボン6着、靴下8足、ハンカチ6枚、タオル3枚、ナプキン3枚、日常必要とする質素な普段着1着、日曜祭日用のスーツ1着、スカーフ3枚、半長靴2足。その他の道具類として櫛やブラシ、洋服ブラシ1個、歯ブラシ1本、食器（ナイフ・フォーク・スプーン）1セット、ナプキン・バンド1個、雨傘1本、2分の1マース入る石造りの飲用容器1個<sup>14)</sup>のうち、ピアノを除くすべてをズックのトランクと学生鞆一杯に詰め、父親に伴われて、家を後にした。これは、彼の人生で最初の旅立ちであった。母との別れはことのほかつらかった。しかし、彼は、母の流儀に従って、「今やしっかりと勇気を奮い起こし、変更不可能なことを黙ってこらえなければならぬ<sup>15)</sup>」いことを知っていた。父ともミュンヘン駅で別れた。フライジンク駅頭に降りた時、彼は、やはり淋しさに胸の張り裂けるような思いがし、涙を禁じ得なかった。教職準備学校での3年間の生活は、こうして始まったのである。

教職準備学校は、もちろん、師範学校と同じ敷地内にあり、新1年生は16名であったという<sup>16)</sup>。彼の宿舎は、教員住宅の上の階にあり、彼は、朝5時からの、それこそホームシックに罹っている暇もない程の過密なスケジュールをこなさなければならなかった。教職準備学校における——そして恐らくそれに続く2年間の師範学校でも同じであったであろう——授業の様子は、彼の後年の著書『教育者の魂』(Die Seele des Erziehers und das Problem der Lehrerbildung, 1921)や『自叙伝』での記述から窺い知ることができる。すなわち、この学校は、「記憶に基づく知識の遊戯に墮して、決して陶冶(教養)を与える施設ではなかったし、また教職のための施設でもなかった<sup>17)</sup>」のである。更に、『自叙伝』によれば、「我々は、ただの一つの器具を見ることなく、いわんや、一つの実験を見ることもなく、物理学を学んだ。図画の授業では、退屈な手本をただひたすら正確に模写することを強いられた。我々は、歴史の専門家による何らかの生き生きとした描写を体験することなく、歴史の入門書を暗記し、それを復唱した<sup>18)</sup>」とある。もとより、ここで挙げられた以外の教科でも、陳腐で無味乾燥な副読本や入門書が唯一の教材であり、その機械的な暗記・暗誦が唯一の教授法であったことに変わりがない。教職準備学校は——そして師範学校も同様——純然たる「学習学校」・「書物学校」に他ならなかったのである。

しかし、ゲオルクは、はっきりと教師を天職とまで感じるのにはまだまだ程遠かったとしても、止むを得ず、そしてまた両親を喜ばすために、よく勉強した。『自叙伝』には、こう書かれている。「私は、味気ない入門書の内容をいとも簡単に暗記したし、授業においてはどの瞬間も集中することができた。私は、情熱的にピアノを弾き、みすばらしくバイオリンを奏でた。教職準備学校の怒りっぽい首席教師(Hauptlehrer)の最も粗野な取り扱いに対してすらいつも悪く思うことはなかった<sup>19)</sup>」と。1学年の終了時の成績で、彼は、全生徒のうち上から数えて3分の1の中に確実に入っていた<sup>20)</sup>。だが、音楽の成績だけが芳しくなかった。ピアノが評点3(genügend)、バイオリンは評点4(mangelhaft)であった。そのころの彼にはまだ十分楽譜が読めなかったし、また、苦勞してその基礎を修め、楽譜を読めるようになることが一体何を意味するのか、その究極の目的への洞察すら欠けていた。そんな彼を見て、長兄ヨーゼフが、少年の萎えた熱意を蘇らせようと、一つの提案を思い付いた。1年後までに、初心者にとってかなり難しいピアノ作品を何か一曲弾いて聞かせられる程上達したならば、懐中時計(Taschenuhr)を買ってやるというのである。懐中時計は、ゲオルクの永年の憧れの的であった。彼がこの提案に「否」と答える筈が

ない。これまでの、譜面を見る時の退屈さも吹っ飛び、彼のピアノ練習に熱が入ったのは言うを待たない。1年後、彼は、待望の懐中時計を手に入れたばかりか、音楽の教科でも良い成績を収めるに至った。だが、この経験において彼が獲得した将来にわたっての収益は、単に今見た外的なものだけに止まらない。それは、マリー・ケルシェンシュタイナーも言うように、一つは、彼に生まれつきの「張りのある意志力 (Spannkraft des Willens)」を本格的に出現させることに役立ったこと、今一つは、ここに音楽の世界への重い扉が打ち開かれ、それが「彼の後の戦闘的な生活において彼にとって慰めにも、失われることのない避難所にもなる筈のものであった<sup>21)</sup>」からである。

この関連で注目すべきことは、ゲオルクがまたもや、つまり、先はグレーフ先生によって、そして今回は長兄ヨーゼフによってうまく「策略」に乗せられて、やる気を出し、所期の目的を達成したことである。たしかに、この教育方法は、「報酬」に基づく条件づけ・動機づけであって、結果だけを重視する考えや野心家・出世主義者に子どもたちを導きかねないし、またそれが「調教 (Dressur)」に化し、単に精神的、肉体的諸力の形式的な機能能力を訓練するに過ぎない「見せかけの陶冶 (Scheinbildung)」に終わる危険性を多分に孕んでいるので、必ずしもほめられた方法ではないが、ケルシェンシュタイナーの場合、このような彼自身の体験にもよるのであろう、後半の彼の教育学において、生徒の持つ「生まれつきの正当な利己主義 (der natürliche berechtigte Egoismus)<sup>22)</sup>」や「生まれつきの興味 (das natürliche Interesse)<sup>23)</sup>」と結び付き、その意に添うような教育方法や施設が、「それでもって……マスを捕らえるバッタ<sup>24)</sup>」として、つまり目的を達するための手段として推奨される。例えば、彼は、ある箇所でこう言っている。「すべての教育は、生徒の生まれつきの興味から始めなければならない。そして教育が完全な成果を収めるか否かは、ひとえに教育者が、彼の意図する目的を、習慣付けと洞察によって生徒の生まれつきの興味と結び付け、融合させることにどの程度成功するかどうかにかかっている<sup>25)</sup>」と。だが、もとより、ケルシェンシュタイナーは、このような処置があくまでも目的実現のための手段に過ぎず、「利己的な方向を向いた意志の方向転換 (eine Umbiegung des egoistisch gerichteten Willens)<sup>26)</sup>」をもたらし他の処置の必要を説くことを忘れていない。しかし、ここは、まだ彼のこの点に関する所説を詳しく展開する場ではないので、上のごとき単なる指摘に止めておく。教育における「興味」の問題は、ケルシェンシュタイナーの人間学の基本テーマの一つであるので、いずれ詳論することになるであろう。ともあれ、少年の日のこうした原体験が、その人の後年の思想を方向付けるということがままあるものである。

ところで、教職準備学校での3年間の生活は、少年ゲオルクから次第次第に「孤独 (Verlassenheit) や貧困 (Armut)、それに寄る辺なき (Hilflosigkeit) の感情」を薄れさせ、代わって「自立への好み (Geschmack an der Selbständigkeit) や未来の価値への予感 (Vorgefühl künftiger Bedeutung)<sup>27)</sup>」を育んだ。それというのも、日曜祭日には、既述のように、美しいボーイ・ソプラノの声を持っていた彼は、フライジnkの大聖堂合唱隊の一員として歌い、「年に15ないし20グルデン<sup>28)</sup>」——グルデン (Gulden) はドイツ統一 (1871年) の際マルク (Mark) に切り換えられ、1グルデンが1.60マルクになった——のお金を稼ぎ、それで蝶や郵便切手を収集したり、再び売ったりすることができたし、また週に4回は町の裕福な市民の家庭から昼食の招待を受けることができた——この「無料給食 (Freitisch)」はここフライジnkでは貧しい師

範学校生に対して行われていた——からである。もっとも、他の3日間は、大きな黒パン1個——それが、両親が月々送ってくれる2グルデンから買える可能な量であった——で満足しなければならなかったが。彼はこのパンにチョークで1日分の印をつけ、その分だけ正確に切って食べていたという。それでも彼は、母からの神聖な贈り物である明朗闊達さだけは失うことはなかった。むろん読書にも励んだが、なかでも「笑える哲学者 (der lachende Philosoph)」とあだ名されたデモクリトス (Demokritos, ca. 460-ca. 370 B.C.) を愛読した。彼の著作は、風刺やユーモア好きのゲオルクにぴったりであったからである。

1869年、3年間の準備期間の後、15歳のケルシェンシュタイナーは、師範学校へ進学した。しかし、彼は、生徒の中で一番若く、その進学に際しては、「後から年齢の特別許可を得ることを条件として<sup>29)</sup>」認められたのであった。師範学校には付設の寄宿舎があり、食事も給付され、彼はやっと食事の心配から解放された。

師範学校の授業は、教職準備学校におけるのと全く変わりなく、専ら入門書の暗記に当てられた。当時既にあちこちの法規定に現れていたような、「習得したものを生徒の中で整理させる」とか、「より大きな確実さとより明晰な直観に導く<sup>30)</sup>」とかいう要求は、差し当たり机上の空論に過ぎなかった。おまけに、そこには、百科全書的性格とでも言うべき危険な傾向が宿っていた。ケルシェンシュタイナーは、1907年に書いた論文「教員養成」(Lehrerbildung)において、教職準備学校から師範学校にかけての5年間に学んだ教科——それは実に36教科にのぼる<sup>31)</sup>——を一つひとつ教え挙げている。それらを整理して並べて見ると、次のようになる。国民学校で教えない基礎科学の初歩(宗教——教会史、聖書物語、教理神学——、世界史、地理学、国語——文学史、作文、文法——、数学——算数、代数学、平面及び立体幾何学——、理科——動物学、植物学、鉱物学・地質学、化学、物理学——、生理解剖学)と少なからざる数の技能(習字、図画——自在画、線画、投影図——、音楽——ピアノ・オルガン・バイオリンの演奏、唱歌、和声学——、体育、農業、果樹栽培、書記の仕事、礼拝)、それに教職教養(一般教育学、教育史、教授法及び心理学)である。しかし、このような「博識と万能 (Vielwesserei und Vieltönnerei)<sup>32)</sup>」の要求程、真の陶冶(教養)にとって手ごわい敵はない。そこから生み出されるものは、決して「教養 (Bildung)」ではなく、単なる「うぬぼれ (Einbildung)」に過ぎない<sup>33)</sup>。後年のケルシェンシュタイナーは口を酸っぱくして、この百科全書主義に由来する生徒の負担過重に警告を発する。教育思想家としての彼の、最初にして、最大のと言ってよい教育原則は、際限のない百科全書的な教材過多の拒否であったが、このような彼の思想傾向を規定したのは、自らの教員養成時代の苦痛と幻滅の体験に他ならなかったと言えよう。

ケルシェンシュタイナーは、精神の成熟とともに、多くの教材を機械的に暗記し、暗誦することを強いるだけの師範学校の教授法に対して倦怠と嫌悪の感情を募らせて行く。他方、彼は、自らの能動的、創造的な能力をより多く発揮でき、従って彼の「興味を惹いた若干の労作領域<sup>34)</sup>」としての作文や作曲に大きな情熱を注ぐことになる。そのころに彼が書いた作文の一部は、彼の孫娘によって公開されているが、それらは、もとより、まだ「作文練習 (Stilübung)」の域を余り出ないものであるとはいえ、当時の彼がかなり熟達した文章を綴ることができ、あらゆるテーマに対して読んで得た知識をうまく組み合わせ、纏めることができる能力を備えていたことを示している。彼の『自叙伝』の記述によれば、時折彼は、自分の作文を2、30ページの短篇小说

にまで練り上げ、同級生に読んで聞かせたという。参考までに、17歳の時に書かれた作文の一節を紹介しておこう。「私は人間である！ それ故に、暇な時間が私を一日の苦勞と混乱から助け出し、意味深い自然の観察から私の創造者へと導き、そしてそこから再び私自身へと連れ帰り、私の高貴で輝かしい品位を想起させる時、私は、思わず歓声をあげる。真の人間のふくよかで、気高い姿が私の前に進み出る。私はその姿を見つけ、心を込めて叫ぶ、『そう、汝こそ人間だ！』と」。そしてこの作文は次の言葉で終わっている。「誰かが我々に向かって『彼は人間だった』と大声で言うならば、我々は、幸せに、また満足して墓に入ることができるであろう<sup>35)</sup>」。後年、ケルシェンシュタイナーは、師範学校時代の自分の作文と、ギムナジウムの教師となって読むことになった同年輩の他の生徒たちの多くの作品とを比べてみれば、自分の作品は「かなり子どもじみた (recht kindlich)<sup>36)</sup>」ものであったと言わざるを得ないと謙遜して書いているが、なかなかどうして、当時の彼の文章には既に侮り難い文才が顕著に現れている。

作曲に関しては、マリー・ケルシェンシュタイナーが愉快的エピソードを伝えている。ある時、ゲオルクは、詩的な表題を持ったアンダンテの曲 (Andante) を書きたくてたまらなかった。モチーフは、既に彼の耳に響いていた。だが、師範学校の超過密スケジュールは、彼にそれを仕上げ、書き下ろす時間を与えなかった。創作意欲に駆られた彼は、ついにある策略に訴えて、その作品を完成しようとした。すなわち、その策略とは、仮病を使って、学校の診療室で静養し、作曲に必要な時間と自由を獲得しようというものであった。彼は、楽譜と鉛筆を上衣の下に隠し、うまく病室に入ることができた。だが、彼は、すぐに大きな計算間違いをしていたことに気付かされた。それというのも、学校の診療室の主要な治療法が断食であったからである。初日は何とか耐え抜いたが、早や二日目、空腹の余り、作曲家としての自信と誇りを失っても悔いがないとさえ思われた。そこで、彼は、病気が治り、退室して行く同級生に、ソーセージを綱に結び付け、「空輸する」——つまり、ケルシェンシュタイナーが3階にある彼の病室の窓からその綱を引っ張り上げるのである——のを手伝ってくれるように頼んだ。それが不運にも、その綱は当時の学校合唱団の指揮者で、後の師範学校長ドレーゼリー (Joseph Dresely, 1818-1892) 先生の窓際に置いてあるゼラニウムの鉢植にひっかかって、動かなくなってしまった。万事休す！ 間もなく、ドレーゼリー先生が窓際に姿を現し、ゼラニウムの鉢植に咲いた時ならぬ異様な花をことさら仰々しく調べた。しかし、先生は、ケルシェンシュタイナーの顔にすばやく、今後二度とこんな馬鹿げた真似は致しませんとの反省の色を認め、今回は、黙って彼のいたずらを見逃してくれたのである。酔いをさませられた作曲家は、もちろん、翌日から宿舎の食卓に再びつくことになったが、その代わり、彼のアンダンテの曲はついに日の目を見ることなく、埋もれてしまった<sup>37)</sup>のである。

そんな出来事があったからかもしれない。ゲオルク少年の関心を惹くことの殆どなかった師範学校の教師たちの中で、唯一の例外がこのドレーゼリー先生であった。彼については、ケルシェンシュタイナーが晩年に至ってなお、「あらゆる時代を通じてずっと消し難い思い出を抱き続けている」人物として、また彼の「實際生活の全体を通じて」の「教育者の模範 (das Beispiel eines Pädagogen)」として懐かしく追想している。たしかに、入門書を読ませるだけのドレーゼリーの教育学や心理学の授業は、ゲオルクを惹きつけること少なかったが、彼の教育的行為——それはケルシェンシュタイナーの表現によれば、「柱のように不動で、魅力の少ない容貌も輝く

目と親切な微笑によって神々しくされて、学級全体を彼の抗し難い眼差しで虜にし、生徒たちの前に立っている」底のものであった——が、しっかりとゲオルクの心を捉えて離さなかったのである。彼には、ドレーゼリーはあたかも「ペスタロッチの生き写し (ein Abbild Pestalozzis)<sup>38)</sup>」のように思われた。この模範は、ずっと後になってケルシェンシュタイナーの教育学の理論と実践を導く「導きの星 (Leitstern)」の役割を演じるようになるものである。

ケルシェンシュタイナーが師範学校の卒業試験に取りかかろうとしていたのは、ドイツ中が普仏戦争 (1870 - 1871年) の勝利と「ドイツ帝国 (Deutsches Reich)」の成立に沸き返っていたころであった。しかし、この輝かしい歴史的な事件も、ここバイエルンにおいては、必ずしも歓呼の声ばかりで迎えられたのではなかった。なぜなら、ドイツ統一は、プロイセン王ヴィルヘルム 1 世 (Wilhelm I., 1797 - 1888) がドイツ皇帝になったことにも象徴されているように、バイエルン王国が新教国プロイセンの臣下になり、1806年以来維持してきた「独立」が消滅することを意味した——実際にはかなりの「自治」が保障されたが——からである。いずれにせよ、バイエルンは不承不承ドイツ帝国への参加を承諾したのであった。普仏戦争勝利の熱狂がバイエルンでは、まるで潮が引くように、一気に冷めてしまったのも不思議ではない。プロイセンとの攻守同盟を守って出兵されたバイエルン兵士の行軍を見て、若き血潮をたぎらせたケルシェンシュタイナーではあったが、今は、間近に控えた卒業試験のために、味気ない入門書と研究ノートの上に注意を集中せざるを得なかった。しかし、努力の甲斐あって、1871年の8月、17歳になったばかりのゲオルクは、「評点 1 (Note 1)」「36人中 7 番<sup>39)</sup>」という立派な成績で卒業試験に合格することができた。

だが、彼自身告白しているように、教職準備学校と師範学校における「5年間というものは、理論的にも、実践的にも、何らの教育的関心を」彼に「目覚ませることなく、過ぎ去ってしまった<sup>40)</sup>」のであった。我々は、彼が教育的関心や教職に対する使命観に真実目覚めるのを将来に待たなければならない。彼が自らの「アイデンティティ」を確立し、真に教師として誕生するのは、いつの日のことであろうか。

#### 第4章 国民学校助教師時代のケルシェンシュタイナー

1871年9月13日、王室学務委員会 (Königliche Schulkommission) は、師範学校を卒業したばかりのケルシェンシュタイナーに、エバースベルク地方事務所 (Bezirksamt Ebersberg) 管内のフォルストイニク (Forstinning) 村に「助教師 (Schulgehilfe)」として赴任するよう、命じた<sup>1)</sup>。フォルストイニク村は、ミュンヘンの東約25キロの所にあり、当時の人口770人前後。彼の赴任することになった学校は2学級から成り、生徒数106名を数えていた<sup>2)</sup>。今でこそフォルストイニクは、国道12号線 (ミュンヘン - パッサウ間) が通り、交通至便の地であるが、そのころミュンヘンからは、マルクト・シュヴァーベン (Markt Schwaben) 駅まで汽車に乗り、そこから5キロの道のりを、しかも沼地の小径づたいに2時間以上歩いて、やっと到着することができるような「田舎」であった。ケルシェンシュタイナーも、彼の最初の勤務地に赴く時、当然シュヴァーベン駅から歩き始めたのであったが、目的地に向かう途中、沼地の小径で「背丈が高く、肩幅の広い、ひげのない」一人の男に出会った。彼は、その男に「フォルストイニクへ行く道はこれでいいんですか」と尋ねた。「そうだ、小さいの」と男は答え、「お前は一体そこ

へ何しに行こうと思うのだ」となれなれしく付け加えた。その「気安くするが見下したような (herablassend)」物言いに少々感情を害されたゲオルクは、重々しく「私は新任の助教師だ (Ich bin der neue Schulgehilfe)」と答えた。すると、見知らぬ男は、両手を頭の上で打ち合わせ、「おお、いまいましい (O verflucht), ……政府ときたら先生としてよくもこんなに小さな子どもを私のところに送ってよこしたものだ<sup>3)</sup>」と嘆いた。その男は、他ならぬ、新任助教師を出迎えに来た首席教師シュトレープル (Fr. X. Ströbl) だったのである。事実、17歳当時のケルシェンシュタイナーは、体格がそれ程大きくなく、また非常に痩せてもおり、子どもと見間違えられても致し方ない位であったという。

そこで、首席教師は、ケルシェンシュタイナーに最初予定していた、13歳から16歳までの遅しい農家の少年が出席する祭日学校 (Feiertagsschule) を担当させるのを諦め、その最終学年の生徒が彼と同年齢に当たる女子祭日学校を受け持たせたのであった。こうして、彼は、「教育の現実 (Erziehungswirklichkeit)」に初めて直面することになるのである。しかし、それは、ヴェーレが言うように、「師範学校時代の記憶から得た知識 (Gedächtniswissen) 以上のもの、及びそれ以外のものを彼に要求する<sup>4)</sup>」筈のものであった。ところが、人は、往々にして、自分が教えられた通りに、他人に教えたがる。ケルシェンシュタイナーも、師範学校時代、あれ程百科全書的な教材の過剰に嫌悪の情を催していたにもかかわらず、今はそのことを忘れ、盛り沢山な、しかも程度の高いカリキュラムを組んで、エバースベルク地方事務所に提出した。もちろん、提出されたカリキュラムは厳守され、その教授目標は、あらゆる障害にもかかわらず達成されなければならない。さもなければ、彼の教師としての適格性は疑われ、昇進にも影響する。彼自身授業において優れた成果を上げ、よい評価を得たいという功名心と生来の熱心さに駆られて、女生徒たちに彼女らの実際の経験とは全くかけ離れた「机上の知識 (Schulweisheit)」をビシビシ叩き込もうとする。その際、彼は、師範学校の教師たちから見覚えた威厳ある態度で彼女らに接した。しかしながら、彼女らは、学業に対しても、また彼の権威主義的な態度に対しても全く無関心であるか、もしくは激しく反抗した。もっとも、なかにはほぼ同年輩の「黒い巻き毛の (schwarzlockig)」紅顔の美少年に「燃えるような愛<sup>5)</sup>」の眼差しを向ける女生徒もいない訳ではなかったが。マリー・ケルシェンシュタイナーが書いているように、「彼女らは途方もなく怠け者であった。いつも彼女らは、学校をさぼる口実を知っていた。時には葬式であり、結婚式であり、あるいは国勢調査や豚の屠殺であった<sup>6)</sup>」。いつも朗らかで、熱心で、活発ではあるが、気短なゲオルクは、思い通りに成果の上まらない生徒の学業状態に、次第に、焦燥と不満の色を募らせる。フェルナウ＝ケルシェンシュタイナーが紹介している学級日誌 (Klassentagebuch) の所見欄には、生徒の出席の悪さと彼女らの能力の欠如に対するケルシェンシュタイナーの怒りと失望の言葉が満ち満ちている。1871年10月には早くも次のような記入がある。「(生徒の) 進歩は非常に遅い。学校への出席も全くよくない。読み方が非常に弱い。算数は時折もっと劣る。言葉の知識 (Sprachkenntnisse) が皆無であり、正書法に従って書くこと (Recht schreiben) についても同様である<sup>7)</sup>」。11月7日に「今日は全生徒が出席した (Heut alle Schüler da)」と喜んだ彼も、12月1日には「任務を果たすことができなかった。というのは、子どもたちの4分の1しか出席していなかったのだから」。更に12月11日には「嘆くしかない、なぜなら、全然生徒が出席しなかったから」と記入せざるを得ず、今更ながらこの厳しい現実を前にして驚きと困惑の

表情を隠すことができなかつた。

しかし、もちろん、彼は、学級日誌に単に生徒に対する不平不満だけを書き連ねていたという訳ではない。11月22日には「書き方 (Schreiben) は昨日と同じ、読み方は良くなった。そう急ぐな (Immer langsam voran)……算数は前より良い。正書法に従って書くことはまあまあ (so-so lala) だ」と書き、彼が絶えず、各教科における生徒の進捗具合を正確に把握しようと努力していることを示しているし、また、生徒たちの心に火を点し、蒙を啓いてくれることを知られざる神に祈り (1月20日)、「おおむね満足だ (Im allgemeinen zufrieden)」(2月20日)と確認できるまで彼の教授努力を傾注していることをも窺わせる<sup>8)</sup>。

こうした学級日誌に記入された「非常に意気盛んで、愉快的 (so temperamentvoll und spaßig)」彼の所見を読めば、17歳当時のケルシェンシュタイナーの人間像が容易に浮かび上がってくるだろう。これらの所見欄は必ず上役によって点検されるものであり、それを承知で、なおかつ上に見たような率直で思い切った言辭を書き並べたことからわかるように、彼は、「全くの無頓着さと向こうみず、あらゆるしきたりに対する軽蔑<sup>9)</sup>」といった、父親護りの、そして後に彼の人となりの大きな魅力の一つに数えられる特徴を既に遺憾なく発揮していると言える。

そのような彼の無鉄砲さは、別の面でもすぐ現れる。すなわち、彼が失望と落胆を感じたのは、単に学校ばかりでなく、この僻村フォルストイニクにおける知的、文化的環境に対してでもあった。ここでは、彼は、同年輩の友人がなく、全くの「異邦人」に止まっていた。なぜなら、「若い農夫たちと交際することは、彼のできたでの權威が許さなかつた<sup>10)</sup>」からである。また、彼の読書と学習に対する渴望は日毎に高まっていったが、村には借りるべき書物もなければ、自分で買える程に十分な俸給をまだもらっていなかった——1871年の大晦日に支給された彼の最初の俸給は、年額250グルデンで、彼はそれを「使用人並み (dienstbotenmäßig)」のもののみなして不満を表明している<sup>11)</sup>——。そこで、彼は、大胆にも、フォルストイニクを管轄しているエバースベルク地方事務所に宛てて、「自己の補習に必要な書物や楽譜を調達<sup>12)</sup>」できるよう、地方基金からの補助を請願した。それは、就任後1年たった1872年10月のことであり、当時では全くもって、向こうみずな行動だと見られても仕方のないものであった。

エバースベルク地方事務所は、この請願に対して寛大にも転任でもってこたえた。ケルシェンシュタイナーは、アウクスブルク近郊のレッヒハウゼン (Lechhausen) に以前よりよい待遇で——首席教師の家での完全な無料の賄いに、年80グルデンの職務手当 (Funktionsbezug) が付いた<sup>13)</sup>——移ることができた。しかし、ここでも、全力を挙げて努力したにもかかわらず、彼の努力がクラス全体の活気に溢れた学習意欲と輝かしい学力の向上によって報われるという完全な創造の喜びを味わうことができなかつた。いや、むしろフォルストイニク以上に悪い学校状態を見いだしたと言った方がよいかもしれない。というのは、レッヒハウゼンは、当時はまだ、アウクスブルク市の圏内に属してはいなかったけれども、「既に工場都市の周辺部の持つあらゆる特性を帯びていた」からである。小さな家々が教会の周りに押し合うように立ち並び、飲食店だけは立派で大きかったが、学校は古く狭かつた。生徒たちも、殆どすべてが工場労働者の子弟で、怠惰で生意気、厚顔無恥という点では誰も人後に落ちなかつた。「自己の文化的使命を確信している助教師は、大胆にも公道で先生の後を追い回して笑う、否それどころか、口笛を吹いて彼を嘲りさえもする……この郊外の青少年の『教育のない振る舞い』に憤慨した」。彼は、その原因

を、両親が朝早くから夜遅くまで家を留守にし、子どもの教育・監督が十分行き届いていないところに見る。

レッセハウゼンの学校に残されている当時の学校日誌へのケルシェンシュタイナーの記入は、フォルストイニクにおけると同様、いやそれ以上に峻烈を極める。彼はこう書いている。「(生徒たちの)素質は、凡庸の一語に尽きる。……才能のある者は、滅多にいない。もっとも、両親の頭脳活動そのものもたいしたことはないから。生徒たちの思考はすべて、既に金儲けに向けられている」。彼らの知識は、「あたかもホットントットにおけると同様」であり、算数は「零点(Gefrierpunkt) 近く」であり、読み方は「木靴を履いて歩くようにうまく行かない<sup>14)</sup>」と。

自分の権威さえ傷つけられなければ、それで満足している「実直な男 (aus alten Schrot und Korn)<sup>15)</sup>」で、その生活指導も、学習指導も若い助教師の「模範にも、支えにも<sup>16)</sup>」ならない首席教師との間で口論が絶えず、また精神的刺激を与えてくれる適当な仲間も見つからなかったケルシェンシュタイナーは、レッセハウゼンでも孤独と内面的不満を感じざるを得なかった。ここでの唯一の楽しみと言えば、アウクスブルクで地方医官として勤務している長兄ヨーゼフとその若い後妻ユーリエ (Julie Kerschensteiner, geb. Reisenegger, 1846 - 1925) を時折訪ね、本を借りたり、彼らと会話することによってより良き教養への渴望を癒すことであった。そのためには、アウクスブルクまでの2時間の道のりも苦にならなかった。しかし、間もなく長兄はアンスバッハ (Ansbach) に転勤になり、彼ら夫妻はアウクスブルクを去っていった。

だが、意外に早く彼にとって「非常に好運な飛躍 (ein sehr glücklicher Sprung)<sup>17)</sup>」の時は訪れた。1873年4月、彼は、思いがけなく、アウクスブルク市内へ転任することができたのである。それによって、彼の給与は再び上がり、彼の経済生活は事実上安定し、両親に僅かながらでも仕送りすることができるようになった。彼の12歳の時の念願は、今や達成されたも同然であった。それ以上に、彼にとって大きな喜びは、この新しい土地でやっと、長年求めて止まなかった自己陶冶の可能性、すなわち、図書館や劇場やコンサート・ホール、種々の講演会、それに志を同じくする若い同僚との交際を見いだすことができたことである。彼は、積り積った知識欲に駆られて、これらのあらゆる可能性に飛びつき、これを享受した。若干の熱心な、目標を共通にする同僚たちと語らって、小さな補習のグループ (Fortbildungskränzchen) も組織された。彼は、恐らくこの学問的な集いがもたらすであろう、知的な刺激の期待に胸躍らせて、会合に参加するとともに、そこでの発表の機会を待った。ついに、彼の順番が回ってきた。毎回異なった知識領域から報告がなされることになっていたので、ケルシェンシュタイナーは、化学を受け持つことにした。彼は、しかし、無意識のうちに、師範学校で学んだのと全く同じ方法で研究し、発表の準備をすることになった。より具体的に言えば、彼は「もちろんただの一度も実験することなく」、当時最も有名な化学の教科書であったシュテックハルト (Julius Adolph Stöckhardt, 1809 - 1868) の『化学の学校』(Die Schule der Chemie. 1. Aufl., 1846) を読み、そこで仕込んだ「化学的知識」を基に「講義」を組み立てたのである。言うまでもなく、それは、当時一般的な研究法と教授法を忠実に実行したまでのことであったが、彼の初講義の結果たるや、彼が50年以上たってもそれを「私は決して忘れていない」と苦々しく思い起こしている程に、惨憺たるものであった。「2時間後、私の7人の聴衆のうち大部分は、眠ってしまっていた<sup>18)</sup>」のである。

これまでの彼の自信は、今や、完全にぐらついた。彼は、師範学校で「評点1」の成績で、従

って、非常によく教育された、「教養」のある人間という保証を得て卒業したのであった。彼はそれを誇りにし、それを信じて疑わなかった。だが、どうだろう。ひとたび学問の道に深く通暁しようと努力し始めてみれば、片手間仕事では到底捉え難い「学問の崇高さの予感 (Ahnung von der Hoheit der Wissenschaft)」が彼の胸にひしひしと迫ってくるのみならず、彼がかつて「教養」の名のもとに信じ、誇っていた師範時代の知識の一切が疑惑の暗雲に覆われてしまうのを禁じ得なかった。否、それらの価値は、彼の目の前で音を立てて、見るも無残に崩れ落ちたといった方が適切であろう。マリー・ケルシェンシュタイナーが言うように、ゲオルク少年は、「今彼の修業時代の記憶の飼料 (Gedächtnismast) がただ精神の上辺だけの見せかけとして、自らの内的本質との何らの結合力を持たないままであったことを理解し始める<sup>20)</sup>」。そうして、彼の心の中に「最初は全く微かに、やがて次第に強く、一つの感情が——すなわち、何とも言いようのない無知の感情 (Gefühl einer namenlosen Unwissenheit) が目覚めてきた<sup>21)</sup>」のである。そしてそれとともに「以前には決して知らなかったような認識への渴望<sup>22)</sup>」が彼を襲った。だが、どうしたことか、彼には、「暗闇に迷い込んで仰天している子どものように、明るい所への出口が見つからない<sup>23)</sup>」。悶々の日々が続き、「絶望的な気分 (eine trostlose Stimmung)<sup>24)</sup>」が彼の心を領していた。

しかし、偶然の出会い (Begegnung) が彼の人生に根本的な転回を促したのである。それは次のようにして起こった。すなわち、ある日のこと、彼がいつも昼食をとることを常としていた「メイヒェレ園 (Meuchele-Garten)」で、たまたま、当時のアウクスブルク郡実科学校 (Kreisrealschule) の校長 (Rektor)——しかし、ヴェーレによれば、当時はまだ王立郡実業学校 (Königliche Kreis-Gewerbeschule) の地理や歴史、ドイツ語の教師で、1877年にエルランゲン (Erlangen) の実科学校長になった<sup>25)</sup>——プンプリン (Gustav Pumplin, 1837-?) 博士と同席することになった。そして、自分の「内心の苦しみを他人の前で洩らすこと」は、いつものケルシェンシュタイナーの流儀ではなかったが、しかし、今回は少し事情が異なっていた。彼には、もはや「掻き立てられた感情を秘密にしておくことができなかった<sup>26)</sup>」。彼は、博士に胸中を打ち明けて、相談にのってもらうことにした。すると、博士は、「一体、君はなぜ文科系ギムナジウム (humanistisches Gymnasium) へ行って、更に研究を続けようとししないのかね」と大声で反問した。この言葉は、まるで稲妻のようにゲオルクの心を打ち、その一撃は、彼の魂の奥底に、彼自身いまだ意識してはいなかったものの、既にまどろんでいたものを激しく揺ぶり起こすに十分であった。ボルノー (Otto Friedrich Bollnow, 1903-) がその著『実存哲学と教育学』(Existenzphilosophie und Pädagogik, 1959) において、「他の人間がその人間の核心 (Kern) に触れ、その結果、彼のこれまでの生全体が一切の計画や期待とともに根本からの変更を余儀なくされ、彼にとって全く新しいことが始まる」というようなことが、「運命的に人を襲うところでのみ、我々は本来的な意味で出会いについて語るができる<sup>27)</sup>」と述べているが、まさにそのような厳密な意味での出会いが、今ここに起こったのである。それによってケルシェンシュタイナーは、彼の究極の核心において根底から揺り動かされ、仮借のない力で自らの生の方向転換を迫られるのを感じた。彼は、ここに、ギムナジウムで新たに初めからやり直そうと決断するのである。

しかし、残された大きな問題は、この考えをどのようにして実現に移すかであった。彼は、両親からの仕送りを一銭も期待することができなかった。むしろ逆に、彼らが近い将来もはや働く

ことができなくなった時——父は既に古稀を過ぎ、母も40歳に近かった——、彼は、彼らを扶養しなければならなかった。今のまま職務を続けたならば、恐らくあと数年にして正教師 (ständiger Lehrer) の地位は約束されていた。自らの社会的地位と経済生活が安定することはもとより、両親にも十分な孝養を尽くす余裕ができるであろう。それにもかかわらず、自己の学問への抑え難い渴仰のために、これらすべての安定と幸福を捨て去り、再び、新たな不自由を背負い、苦難に耐えるべきであろうか。彼は、迷いに迷った。そのころの彼の詩には、「目覚めよ、勇気！迷うことはよいことでも、男らしいことでもない！<sup>28)</sup>」と、自らを鼓舞し、自らに決心の実行を促す言葉が読み取れる。

彼は、まず初めは、職務を続けながら、ラテン語の自習を始めるという比較的穏当な手段を取った。管理人の息子であるギムナジウムの5年生 (Obertersianer) が「6節ごとに1グロッシェン (Groschen)」でケルシェンシュタイナーの翻訳を直してくれた。彼の上達は早かった。しかし、間もなく、教師としての義務とラテン語の学習に対する情熱が両立し難いことに気付いた。ついに、彼の中で燻り続けていた決心に火のつく日が到来した。1873年12月5日(日曜日)のこと、この日一日をラテン語文法の学習と翻訳に費やした彼は、夜も更けてから、半ば発作的に、アウクスブルク市役所に宛てて辞職願を書いた。彼は、「何の辞職の理由を挙げることなく、無条件で、つまり、場合によっては再び教職に採用されたいという希望を述べることもなく」、国民学校助教師の職から退くことを乞うたのである。それは、彼自身言っているように、「後悔して改心することができないように、一切の橋を取り壊したいと思った」からである。彼は、急いで封をして、深更をも顧みず、投函した。一週間以内に彼の願いが認められ、1874年1月1日付けをもって正式に退職することになった。ここに、ケルシェンシュタイナーの教育活動の「第一期 (der erste Abschnitt)」が終わりを告げたのである。両親は、息子の大胆な行動に肝を潰したが、今や「ルビコン川は渡られた。進め！ (Der Rubikon war überschritten. Vorwärts!)<sup>29)</sup>」。

さて、我々は、彼のその後の苦渋に満ちた生涯を迎える前に少し止まって、今仔細にわたって跡づけてきた2年余りの国民学校助教師生活において、果たして彼は何を体験したのか、また将来の彼にとっていかなる収益もたらされたのかを明らかにしておこう。

まず第一は、ヴェーレが指摘しているように、師範学校の寄宿舎の中で少々世事に疎く成長した若者が、農民や労働者の子どもたちとの接触によって、否応無しに子どもの現実並びに生活の現実を直視させられ、それと同時に教師という「職業の難しさと責任<sup>30)</sup>」を痛感させられたことである。既に見たように、この新任助教師は、教育に対する意欲と情熱に燃えてはいたが、それだけに余計挫折や徒勞の経験を積み重ねる。しかし、幸いなことに、その経験は、決して彼を失意と諦めに追いやらなかった。なぜなら、熱心な彼の教育的努力は、成程血気に逸った功名心を含み、教育効果を上げることへの余りにも性急な期待と結び付いていたとしても、学問に通暁したいという強い意欲に支えられていたからである。彼は、それ故に、困難な職務遂行の責任とそれにひきかえ自己自身の度し難い「無知」を自覚して、ますます活発に自己の内面を働かせる。真の「教養」ないし学問を求めての自己陶冶への努力は、この時期以降の彼の顕著な性格の特徴をなすものと言ってよい。ただこの時期の問題点は、彼にはまだ学問・研究のための正しい方法がつかめていなかったことである。入門書を暗記すること、これが彼の唯一の研究法であった。化学の研究法については既述の通りであるが、生徒の理解を得る場合でも、彼自身の書いている

ところによれば、学級の子もたちを「最も簡単にさえ観察することなしに<sup>31)</sup>」、当時評判のよい心理学の入門書を繙くことによって行うという具合であった。これは彼の体験した師範学校教育の然らしめるところであったので、そこにおける「単なる記憶の教育、副読本の暗記、それに浅薄な主知主義<sup>32)</sup>」に対する彼の敵意がめらめらと燃え上がったのも理由なしとしない。ともあれ、彼の国民学校助教師時代の実践においては、彼のギムナジウム教師時代のそれを特徴付け、また彼の教師論のライトモチーフとなる子どもに対するペスタロッチ的な愛と献身は少なくともまだ基調をなして、それどころか、後に教師、ことに国民学校の教師にとって「決定的なものではない<sup>33)</sup>」とされた学問・認識への渴望、換言すれば、「理論的人間の精神 (Geist des theoretischen Menschen)<sup>34)</sup>」ないし「理論的態度 (das theoretische Verhalten)<sup>35)</sup>」が前面に出ていたことは極めて興味深い。

第二は、ケルシェンシュタイナーが、教育現実との最初の出会を通して、生徒たちを惹きつけ、かつ生徒たちが真に望むものは「干からびた (dürr), 無味乾燥な (trocken)」体系的知識ではなく、彼らの生活に密着した生きた知識であるという認識を得たことである。彼は、既にフォルストイニク時代に次のように書いている。「国民学校は、貧民の唯一の財産 (das einzige Gut des Armen) である。上級学校を教育 (Ausbildung) のために利用する金と時間を持ち合わせていない貧民は、自らの国家の有能な市民 (der tüchtige Bürger des Staates) に、宗教の高貴な成員 (das edle Glied der Religion) に、また家庭の父として有能な扶養者 (der fähige Ernährer) にするところの一切のものをどうしても国民学校で獲得しなければならない。ところが、現代において、世間に踏み出して行く少年には、僅かばかりの読み、書き、算数の知識のほか、何一つ持たせてやる必要がないと信じている者がいるとしたら、そんな奴は、全くの物知らずである。……庶民と言えども、地理、歴史、理科 (Naturkunde) の知識を持つことが必要である<sup>36)</sup>」と。もちろん、私が、もしここに、後年の彼の著作や改革事業においてよく使われた言葉と類似した表現、例えば、「国家の有能な市民」とか「有能な扶養者」とか「理科」とかを見いだすからと言って、彼の改革思想の誕生期を求めようとすれば、それは、性急のそしりを免れないであろう。とはいえ、ヴェーレとともに、これを、「彼の教育現実との出会いに基づいて彼に生じた、それ故に彼にとっては師範学校の入門書から得た知識よりはるかに強力な真実の内容を持った彼の経験の最初の記録<sup>37)</sup>」として注意を喚起するだけに止めるなら、それは許されるに相違ない。

最後に、もう一つ。ケルシェンシュタイナーにとってさほど大きな収益をもたらさなかったかに見える師範学校在学と国民学校助教師としての活動は、意外にも、彼がミュンヘン市視学官に選ばれる際、「特に彼に有利」な条件として働いたのである。なぜなら、視学官という職には、国民学校制度と中等学校制度双方に対する理解と経験が求められたからである。そして、この両者における教授経験を持つ彼が、「信頼できる (vertrauenswürdig)<sup>38)</sup>」とみなされ、視学官に選出されることになるのである。人生においては何が結局幸いするか、本当に、わからないものである。

## 第5章 学生時代のケルシェンシュタイナー

さて、19歳半ばに達したケルシェンシュタイナーにとって、師範学校で得た中途半端な教養

(Halbbildung) をかなぐり捨てて、真の教養に対する自己の渴望を満たすことが、最大の関心事となった。遅蒔きながらも、彼は、「あたかも乳飲み児のように、師範学校が差し出した36の乳房にではなく、唯一の乳房、すなわち、古典古代 (das klassische Altertum) の乳房に吸いつき始めた<sup>3)</sup>」。つまり、文科系ギムナジウムに入学するために、ギリシャ語とラテン語の学習に専念し始めたのである。間もなく、以前から翻訳を直してくれていたギムナジウム5年生の手に負えなくなるまでに、彼の語学力は向上した。代わって、9年生 (Oberprimaner) が指導してくれることになった。しかし、それとともに謝礼も、6節ごとに1グロッシェンから6グロッシェンへと上がった。

惜しげもなく、国民学校の教職を投げ打って、いわば背水の陣を敷いて勉学に臨んだケルシェンシュタイナーではあったが、生活費はもちろん、語学の指導の謝礼代を稼ぐために、家庭教師のアルバイト——彼は銀行家クロップファー (Klopfer) の3人の息子のために、毎日補習授業 (Nachhilfeunterricht) をしていた<sup>2)</sup>——が不可欠であり、それが彼から多くの学習時間を奪い、彼を心理的に随分苦しめることになった。「彼は今や、自分が実際に見たと思った島に到着するために、海に飛び込み、それが蜃気楼であるに過ぎなかったことをやっと知った男にも似ていた<sup>3)</sup>」。余程の幸運に恵まれない限り、彼の払った犠牲は報われないままに終わってしまうかもしれないなかった。

そんな瀬戸際にまで追い詰められていた彼に、誠に幸運なアルバイトの口が、彼の長兄ヨーゼフの妻ユリエから紹介されたのである。それは彼女の親戚で、公証人 (Notar) の未亡人であるミュラー (Müller) の娘たちに、ピアノと歌を教えるに欲しいというものであった。彼は、この仕事によって月20マルクを得、財政的に助けられたばかりか、予期せぬ二重の幸運を授けられたのである。

その一つは、ミュラー家の3姉妹の中の末娘ゾフィー (Sophie Müller, 1858 - 1915)。当時16歳の瑞々しい魅力をたたえた、可愛い女生徒に、彼はたちまち心を奪われる。彼女にはもちろん大勢の取り巻き連中がいたのだが、彼は「熱烈な求愛 (die stürmische Werbung)<sup>4)</sup>」で彼女の心を我がものにし、母親の猛反対にもかかわらず、その後、実に10年以上の交際を経て、1886年4月27日、二人はめでたく結婚することになる。

第二は、もっと直接的なこと。ミュラー家は、アウクスブルク市で最も優れた文科系ギムナジウムを運営しているベネディクト修道会の神父たちと長く親交を持っていた。彼らは、ミュラー家の人々の話を通じて、ギムナジウム進学を目指してギリシャ語とラテン語を勉強しているが、貧困のためギムナジウムの教師に指導してもらい余裕がなく、途方にくれている若者がいることを聞き知った。彼らの中の一人で、第7学年 (Obersekunda) の担任教師 (Ordinarius) であったセップ (Pater Bonifaz Sepp, 1839 - 1897) 教授が、その話を聞いていたく心を動かし、ケルシェンシュタイナーを自分の許に何度か呼び寄せ、「彼の才能と本性の純粋さを確かめた<sup>5)</sup>」うえで、この先、所期の目的を達するまで、無料で個人教授を授けてやろうと申し出てくれたのである。「それで私は救われたのであった (Damit war ich gerettet.)<sup>6)</sup>」と、後年彼は感謝に満ちて書いている。「学習者の真面目さと教師の献身」のお陰で、1年後には「当然なお存在する不備 (Lückenhaftigkeit) にもかかわらず<sup>7)</sup>」、ギムナジウムの第8学年 (Unterprima) へ編入試験を受け得る位にまで学力が進歩したのである。かくして、ケルシェンシュタイナーは、アウク

スブルクの聖シュテファン・ギムナジウム (St. Stephan Gymnasium) の第8学年の試験を受け、編入を許された。それは国民学校助教師の職を辞してから1年半後、彼21歳のことであった。

彼が、幸福な気持ちに包まれて、ギムナジウム8年生として最初の登校をした日、第8学年の担任教師リーベルト (Pater Narzissus Liebert, 1844 - 1903)——ケルシェンシュタイナーは自叙伝に誤ってリップパート (Lippert) と書いている——教授が試験の答案を返してくれた。それによれば、本来ならば、彼は合格していなかったのである。なぜなら、ラテン語の答案には「決して絶望することなかれ (Nil desperandum)」, ギリシャ語のそれには「この答案は不可 (Diese Arbeit ist ungenügend)<sup>8)</sup>」と書かれてあったからである。恐らく、彼の才能と精神を熟知していたゼップ教授が合格判定会議で彼を相当掩護してくれたのであろうし、また他の教授陣も単に杓子定規に判定するのではなく、情状酌量し、彼の将来性に賭けてくれたのであろう。こうした寛大な計らいに対して意気を感じないケルシェンシュタイナーではない。マリー・ケルシェンシュタイナーも、次のように書いている。「彼は、今こそ自分に内在している全精力を挙げて、また全身全霊を打ち込んで目標に向かって前進しようという名誉な義務に駆られるのを感じた<sup>9)</sup>」と。

ギムナジウムの教師たちは、もちろん、彼を失望させることはなかった。担任のリーベルト教授は、彼のそれまでに知った教師の中でも最善の教師 (der beste Lehrer) に属していた。彼は、文字通り、体力の続く限り、あらゆる学問分野で彼の能力と可能性の限界に挑戦した——だが、彼は、余りの体力の酷使の故に、神経性の頭痛に悩まされることになり、それが彼の持病となった——。そして、彼自身も述べているように、早くも1年後、彼は36人の「同級生の大部分を追い抜いた<sup>10)</sup>」のである。翌年、彼は、高校卒業 (大学入学) 資格試験 (Abitur) を受け、素晴らしい成績——「評点1 (Note 1)」——でギムナジウムを卒業した<sup>11)</sup>。その卒業証書には、「彼の意志の驚くべき粘り強さに対する賞讃と彼の卓越した音楽的才能の特別の確認」が書かれてあった。しかし、成功は苦悩や試練によって購われるという世の習い通り、評点1という卒業試験の立派な結果も、1877年6月25日、丁度卒業試験の真最中に父アントーンを失う——彼は脱腸を患って、76歳で亡くなった——という悲しみを乗り越えて、かちとられたものであった。

今や、ケルシェンシュタイナーは、大学で何を専門に研究するのか、その決断に迫られた。法律学を研究しようかとふと考えたりもしたが、ギムナジウムの教師の一人シュテングル (Stengl) が彼に数学を勧めた時、それが「自己の精神の精密な (exakt) 知識への欲求<sup>23)</sup>」を最もよく満足させるように思われ、彼はその勧めに従うことにした。しかも、この道には教職に尽くすという可能性が伴っていることも、彼の選択を容易にした。当時、家庭の経済状態が再び持ち直していたため、彼には「他のどんな職業をも選べる可能性が与えられていた<sup>13)</sup>」にもかかわらず、彼はもはや「最も良い学校で最も厳密な教科を教える、最も良い教師になろうという唯一の功名心<sup>14)</sup>」以外の何も持たなかった。ここにおいて、私は、以前解答を保留した問いに対する答えを見いだすことができる。ケルシェンシュタイナーは、教職への強い内的使命感を抱いて、大学へ進学したのである。それは、1877年10月のことであった。この意味で、ギムナジウムの上級学年における2年間というものは、彼の内面の発展にとって、極めて重要な意義を持っている。すなわち、この時期において彼は、既に見たごとき自己の能力の限界に挑戦する「実存 (Existenz)」を賭けた勉学を通して、真の「自己」を発見したのであり、また教師としてのアイデンテ

ィティの確立しているゼップ教授やリーベルト教授を初めとするギムナジウムの教師たちから強い人格的感化を受けて、自らも教師として立ちとうとする使命観と生き方を身につけたのであった。それにしても「最も良い学校で最も厳密な科学を教える、最も良い教師になろう」という常に最高のものを目指して努力する生き方は、全くもって彼らしい「ファウスト的衝動 (faustischer Drang)<sup>15)</sup>」の発露と言うべきであろう。

こうした明確な目的意識と学問研究へのひたむきな情熱を持って、ケルシェンシュタイナーは、初め、ミュンヘン工科大学 (Technische Hochschule München), 後に、ミュンヘン大学 (Ludwig-Maximilians-Universität München) の講筵に列する。これらの大学は、当時、錚々たる教授たちが数多く集まっている所として知られていた。彼が両大学で数学の教えを受けたのは、ビショップ (Bischoff), クライン (Felix Klein, 1849-1925), ブリル (Alexander Brill, 1842-1935), リューロート (Jakob Lüroth, 1844-1910), ザイドル (Philipp Ludwig Ritter von Seidl, 1821-1896), バウアー (Gustav Bauer, 1820-1906) といったいずれ劣らぬ一流の教授たちであった<sup>16)</sup>。また学生たちも、これらの教授たちの、なかならず当時のドイツを代表する「偉大な数学者<sup>17)</sup>」クライン教授の令名を慕ってミュンヘンにやってきていただけあって、天才的な若者揃いであった。ケルシェンシュタイナー自身、多数の研究仲間の名を書き連ねているが、その中からめぼしい人を拾うと、後の有名な理論物理学者で、1918年のノーベル物理学賞の受賞者プランク (Max Planck, 1858-1947) を筆頭に、後のチューリヒ工科大学教授フルヴィツ (Adolf Hurwitz, 1859-1919), 後にそれぞれミュンヘン工科大学の教授になったフォン・ダイク (Walter von Dyck, 1858-1934), フォン・ブラウンミュール (Anton Edler von Braunnmühl, 1853-1908), そしてデューレマン (Karl Doehleemann, 1864-1926), 後のダルムシュタット工科大学教授ヴィーナー (Hermann Wiener, 1857-1939), それにケルシェンシュタイナーが最初に勤務することになるニュルンベルクのメランヒトーン・ギムナジウム (Melanchthon-Gymnasium Nürnberg) での同僚シュライエルマッハー (Ludwig Schleiermacher, 1855-1927)——彼は高名な哲学者で、神学者でもあった、かのシュライエルマッハー (Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834) の後裔であった——などが挙げられる<sup>18)</sup>。このような尊敬すべき素晴らしい友人たちに恵まれたことを、ケルシェンシュタイナーは、「特別の幸運」とも、「幸運な偶然<sup>19)</sup>」とも述懐している。

むろん、高等数学の思考法に通暁することは、彼にとってそれ程容易なことではなかったが、彼は、持ち前の粘り強さを発揮して、「彼の学問において無器用な初心者には長くは止まらなかった<sup>20)</sup>」。そして、自己の専門に精通すればする程、「精神的に成長し、どんどん前進しているという満足感<sup>21)</sup>」が彼の心を捉えるのであった。大学の教官たちとの出会いについては後に触れるとして、彼にとって自己の学生時代を飾るにふさわしい最も楽しく、有意義な出来事は、1877年にミュンヘン市内にある二つの大学で数学や物理学を専攻する学生たちで結成された「数学会 (Mathematischer Verein)」への参加であり、その会員たち——プランクがその学会の創立者であり、前述のケルシェンシュタイナーの友人たちがその主要なメンバーであったことは言うまでもない——との交際であった。彼らは、まずもって、「学徒 (Jünger der Wissenschaft)」であることの感激に酔い、「自由、名誉、祖国 (Freiheit, Ehre, Vaterland)<sup>22)</sup>」という旗印の下に固く団結していた。その会合は、いつも、両大学のほぼ中間にあるシェリング街 (Schellingstraße)

の酒場で持たれた。そこで彼らは、講演し、計算し、議論し、飲んで歌い、騒ぎ合った。そんな催しの一般的雰囲気についてはケルシェンシュタイナーの恋人ゾフィーに宛てた手紙が最もよく伝えている。「それはいつも素晴らしい夜の催しです。そこには純粋な若者が、純粋の数学者が、大抵は、既に6学期、7学期あるいは8学期目の数学者が集まっています。誰もが自分の専門に精通していて、怠け者でどうしようもない奴は一人もいません。……私は、まだ彼らの中で最も愚か者です。けれども私も、ひとかどの者になればよいかと願っています。そのような夜の催しは、数学か物理学の領域の講演で始まります……その後数学の問題が出され、黒板で解かれます。それについて議論がなされ、その合間に洒落も出されます。しかもそれは数学的な洒落で、見事なものです。そうして11時になれば、会合の第一部は終わり、代わって芸術が支配します。どんな芸術ですって。最も魅力的な学生歌が歌われます。そしてどんな歌手が歌うかって。歌手の中で一番うまいのが私です<sup>23)</sup>」。

こうした多数の卓越した頭脳の集まりである数学会において、ケルシェンシュタイナーが、「会長 (Vorsitzende)」の職を5学期間勤めたということは、注目されてしかるべきであろう。恐らく、彼が皆の中で年長者であったことも関係するのであろうが、やはり、「彼の溢れ出るユーモアと、事を決するに非常に断固たる所があるにもかかわらず、角を立てずに済ませる天与の才<sup>24)</sup>」が多数の「侍たち」を一つに纏めるのにあずかって力があつたことは疑いを容れない。ここには、後年の目醒しい学校組織家、教育会議での名議長としての彼の片鱗が既に現れているように思われる。

ところで、ケルシェンシュタイナーは、既述の優れた教授たちとの出会いの中で、多大の学問的刺激を受けたことはもとより、決定的な人格的覚醒を経験するとともに、将来の教育思想の堅固な基盤を成熟させることができたのである。ここでは、その代表的なもの二つを選び、それぞれについて説明を加えるとともに、それと関連させてこれまで叙述していなかった彼の学生時代の生活を補うことにしよう。

その第一は、彼がビショップ教授との出会いによって、「教師」の理想像を明確に把握したことである。先にも触れたように、母親の商売がうまく軌道に乗り——彼女は、今や、市営の市場で肉製品の小売店を借りて営業しており<sup>25)</sup>、10数年振りに帰郷する息子に、国民学校教師になったばかりの弟アントーンと共同の部屋をツヴァイブリュッケン街 (Zweibrückenstraße) 1番地に借りることができたのであつた<sup>26)</sup>——、最低限度の生活は完全に保障されていたケルシェンシュタイナーではあつたが、独立心旺盛な彼は、家庭教師をしながら勉学に励むことにした。しかし、学生としてどうしても必要な経費の支出は、意外に多く、補習教授からの収入だけではとても賄い切れなかつた。そうは言っても、これ以上家庭教師の義務に大事な研究時間を裂きたくなかつたので、彼は、大学から奨学金 (Stipendium) を貸与されることを願つた。だが、そのためには、最初の学期末試験に良い成績を収める必要があつた。ところが、悪いことに、試験前に彼の持病である激しい頭痛が再発した。立派な成績を上げることはおろか、今後研究を続行できるかどうか疑わしがつた。絶望的な不安に駆られて、彼は、ビショップ教授の許に相談に行った。日頃からその荒々しい気性で学生に恐れられていた教授は、悄然と自分の前に立っている若者を見て、「君は何をそんなに塞ぎ込んでいるのだ」と怒鳴りつけた。打ちひしがれた心にその一喝はこたえた。ケルシェンシュタイナーは、絶望の余り、ついに泣き出してしまった。だが、それ

を見て、教授の態度は一変した。「粗野な態度 (Rauhigkeit) は彼の外面に過ぎず、この無愛想な男は、悲しんでいる心を優しく取り扱う術を非常によく心得ていた」。彼は、その後たっぶり1時間、悲しみに沈んでいる学生を慰め、励まし、数学はあらゆる学問の中でも最も精神の緊張を要する学問であるから、暫らく研究を中止するよう忠告した。ケルシェンシュタイナーは、その時、以前はただ一人の学者としてしか目に映っていなかったビショッフ教授の「人間」を見た。彼は感激して、恋人ゾフィーに宛てて教授のことを次のように書き送っている。「ビショッフ教授は、恒星のようにただキラキラと輝くばかりで、その傍に近づくこともできず、望遠鏡でしか観察できない他のお偉方の教授たちとは似ても似つかない」と。かくして、この出会いから、教師の理想像がケルシェンシュタイナーの眼前にくっきりと描かれる。すなわち、その理想像とは、「あらゆる教師は、学問の開拓者 (Wegbereiter der Wissenschaft) であるのみならず、同時に生徒の友人 (Freund) であり、指導者 (Führer) であるべきであろう<sup>27)</sup>」というものである。将来自分も教師になった時、きっとこのような教師になろう、23歳のゲオルクはそう固く心に誓った。それは、1878年3月16日のことであった。

頭痛が治るまで休学することにした彼は、療養も兼ねて、いろいろなスポーツに打ち込んだ。登山、ハイキング、水泳、体操、スキー、アイススケート等々である。登山に関して彼は、セミ・プロ級になり、アルプス山岳協会 (Alpenverein) ミュンヘン支部の会員となって、弟アントーンとともに多くのアルプスや故郷の山々に登っている——それは70歳代に至るまで続いた——し、後にはミュンヘン工科大学教授フィンスターヴァルダー (Sebastian Finsterwalder, 1862 - 1951) らと共同で、中央アルプスの氷河の測量を行うことにもなる。彼は、もちろん、熱心なハイカー (Wanderer) でもあり、近郊へハイキングに出かける時には、シラー (Friedrich von Schiller, 1759 - 1805) の詩集とスケッチ・ブックを手離さなかったという。彼がギムナジウムの教師になってから、12年間に100回以上も生徒たちとハイキングを行っていることは驚嘆に値する<sup>28)</sup>。それも1896年ベルリン郊外のシュテークリッツ (Steglitz) に始まり、今世紀初頭に盛んになる「ワンダーフォーゲル運動 (Wandervogelbewegung)」が現れるずっと以前のことだからなお更である。子どものころからイーザル川で鍛えた水泳は、彼の得意中の得意であり、スキーやアイススケートもお手のものであった。また彼は、強いくるぶしの関節を持っていたので、体育館で走り幅跳びの練習にも励んだという。このように、精神の過度の緊張により、神経性の頭痛に見舞われ、さまざまなスポーツを行うことによって心身の健康を保つことに人一倍気を使っていたケルシェンシュタイナーにしてみれば、後年の視学官時代に、国民学校や補習学校の教科課程に必ずハイキング、体育競技、アイススケート、体操、水泳の授業やクラブを指定したのも、また体育館やスケートリンク付きの校庭を学校に作ったり、無料で水泳の授業を行ったり、体育や健康教育のための条件整備に大きな力を入れることになるのも決して不思議なことではない。

彼が教授たちとの出会いから得たものの第二は、クライン教授——教授は彼より5歳年長であるに過ぎない——によって自己の専門に精神を集中させること、換言すれば、「生産的一面性 (produktive Einseitigkeit)」の意義を教えられたことである。彼は、第3学年においてクライン教授の上級ゼミナール (Oberseminar) に参加を許されたのであるが<sup>29)</sup>、教授は学生たちに「数学はいかなる精力の分散にも耐えられない<sup>30)</sup>」ので、ひたすら自己の専門学科に集中して勉強することを要求した。教授のこの一面性の要求に対してケルシェンシュタイナーは、しかし、

その正当性を全面的に認めようとしな。たしかに、数学が精神の集中を何よりも必要とする学問であることに異論はないが、数学だけに研究を限定せよという要求は、そのお陰で自己の専門領域において独創的な業績を上げ得るクライン教授程の大学者に対して初めて妥当するのであって、自分のような「天成の数学者」に属さない者には当てはまらない。こんな風に考えて、彼は、教授の要求に従わない。もちろん、彼は、自己の専門である数学には何にも増して力を注ぐが、それと同時に、できるだけ多くの文化の賜物を見、知りかつ受け容れることを「青春期の一つの特権 (ein Vorrecht der Jugend)<sup>33)</sup>」とみなして、「他の精神的世界に対しても開かれた態度を取る<sup>32)</sup>」。その結果であろう、彼は、数学とそれと密接な関連のある物理学はもとより、そのほかに言語学の研究にも勤しみ、ドイツ文学と外国文学に親しむとともに、美術に対しては活発な関心を示すのみならず、自在に彩管を揮う術を心得ていたのである。音楽に対する彼の愛好心と演奏能力についても、既述の通りである。総じて、彼の学生時代は、一切の教養の杯を呑み干さんと欲する青年の意気と情熱に満ちた「疾風怒濤 (Sturm und Drang)」の時代であったと言い得るであろう。今見たように、多方面の領域に生き生きとした関心を示し、それぞれの領域でより高い目標を掲げて一生懸命の努力を傾けたケルシェンシュタイナーではあったが、奇妙なことに——それと言うのも、彼は大学時代既に、先述の通り、強固な教職への使命観を確立していたからであるが——、大学在学中について一度も彼の念願に思い浮かぶことのなかったことが一つだけある。では、それは何か。将来の教職活動に備えて、その学問的基礎付けのために、教育学や心理学や教授法の研究を行うということである。彼は、大学においてそれらに関する講義を全然聞いていないし、ましてや独学でそれらの領域の書物を読もうなどという気も起こさなかった。なぜなら、彼自身が書いているように、「師範学校時代からずっと、そのような研究に対して抑え難い反感 (eine unüberwindliche Abneigung) を抱いていた<sup>33)</sup>」からに他ならない。

こんな思わぬ落とし穴があったとはいえ、若きケルシェンシュタイナーは、旺盛な陶冶衝動に駆られて、青春は蓄積の時代と考え、クライン教授の一面性の要求をはねつけたのであった。しかし、その彼は、長年の自己省察と教育実践の結果、とりわけゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(Wilhelm Meisters Wanderjahre, 1829)の中の名高い言葉、「およそ一つのことを正しく知り、かつ実行することは、百のことを中途半端にやるよりもっと高い教養を与える (Eines recht wissen und ausüben gibt höhere Bildung als Halbheit im Hundertfältigen.)」に結び付いて、一事への徹底・深化の教育的意義を強調するに至るのである。しかし、この一事への徹底・深化が多く的事柄への分散よりも一層深い教養へ導くというケルシェンシュタイナー教育学の中心命題の一つは、何よりもまず最初に、クライン教授によって教えられたものであったことは言うまでもない。59歳のケルシェンシュタイナーは、ヘラクレイトス (Herakleitos, ca. 535 - ca. 475 B.C.) の言葉「博学は覚悟 (悟り) を教えるものではない」(田中美知太郎訳)を題辞 (Motto) とした『自然科学的教授の本質と価値』(Wesen und Wert des naturwissenschaftlichen Unterrichtes, 1914)という書物を、「飽むことを知らぬ、そして成功を収めた数学的、自然科学的教授の促進者<sup>34)</sup>」クライン教授に捧げている。

最後に、ケルシェンシュタイナーが大学時代に得た経験の中で将来の彼の教育実践や教育思想の重要な基底となった今一つの経験に簡単に触れておこう。彼は、その経験を家庭教師としての活動から得た。すなわち、彼は大学時代においても多くの子どもたちに補習教授をした訳である

が、それを通して、必要な才能が十分備わっていないにもかかわらず——もっとも、そこには、例えば彼の甥、つまり長兄ヨーゼフの息子ペピィ (Pepi) のように、絵画において極めて高い才能に恵まれているが、文科系の学科には全然興味を示さないというような場合も含まれているが——、両親の高慢な身分意識のせいで、当時「唯一の陶冶施設」とみなされていた文科系ギムナジウムに無理やり進学させられた青少年がいかにか苦しんでいるかを痛感したのである。このような家庭教師活動での経験が、マリー・ケルシェンシュタイナーによれば、「彼が後に要求する弾力的統一学校 (die elastische Einheitschule) の構想の基礎を置いた<sup>35)</sup>」と言われる。彼の弾力的統一学校の構想というのは、1914年キール (Kiel) で開かれたドイツ教員組合 (Deutscher Lehrerverein) の会議における講演——それは「国民統一学校体系の諸問題」(Die Probleme des nationalen einheitlichen Schulsystemes) という題で行われた——で最初に明らかにされたものを指し、陶冶過程の「個性化 (Individualisierung)」をはかるため、すべての生徒に共通の4年間の「小学校 (Elementarschule)」の上に、生徒の種々の才能に対応して「樹木状 (baumartig)<sup>36)</sup>」に分岐した各種の学校類型を組織し、しかも途中で生徒に予期せぬ才能が現れた場合、ある学校類型から他の学校類型への移行が「時間と力の浪費なしに<sup>37)</sup>」に遂行できる有機的で統一的な学校体系を構成しようとするものである。しかし、ヴェーレも指摘するように、こうした構想の基礎をケルシェンシュタイナーの家庭教師活動の経験に求めることは、やはり「早過ぎる<sup>38)</sup>」と思われる。けれども、彼が後年、「国民統一学校体系」の構想を提案する時、青年時代の家庭教師の経験を全然思い起こしていなかったと言え、それは偽りとなろう。ともあれ、ここで最低限確認できることは、家庭教師の経験が一人ひとりの生徒の個性や能力に応じた授業をすることの必要性を彼に教え、それが後のギムナジウム教師としての活動の良き準備となったということである。

ところで、1881年10月18日、ケルシェンシュタイナーは、教職のための国家試験 (Staatskonkurs) を受けた。これは、例年難関であることで知られていたが、彼は、見事「評点2 (Note II)」で合格することができた。この試験がいかにか難関であり、彼の成績がいかにか優れたものであったかは、次の試験結果が示すであろう。すなわち、「評点1」を獲得したのは、全受験生38名中僅か1名であり、「評点2」が5名、「評点3」が11名であって、他の21名は、あわれにも落第したか、初めから受験を辞退したのである<sup>39)</sup>。ゲオルクは、「評点2」を得た5人の中の1人であり、ついに念願のギムナジウム教師となる資格を獲得したのである。

今や、27歳を過ぎていた彼は、独立独歩自らの道を歩むことに強い憧れを抱くようになった。美しい許婚のゾフィーも、アウクスブルクで彼の就職を待ちわびていた。だが、彼の身边には、またもや生活苦が忍び寄ってくる。母の商売が以前程うまく行かなくなったのである。もとより、息子は、これ以上、母の厄介になることを欲しなかったので、良い就職口を探し求めるが、残念ながら、ギムナジウム教師の求人はどこにもなかった。しかし、彼は、意気消沈しない。なぜなら、国家試験合格後、ブリル教授の指導を受けて特別研究を行い、これを博士号請求論文 (Dissertation) に仕上げようと意図していた彼は、その完成までもう少し大学に残って、数学の蘊奥を窮める良い機会であると思ったからである。早く就職が決まれば、成程、それは自分をお金の苦勞から解放してくれるであろうが、優れた学位論文を書くのに必要な時間を大幅に奪うことは確実である。自分は単なる生活のために学問することを好まない。最高の目標を掲げて努力して

こそ、人間は成長する。自分は成長することを欲する。これが、彼の考えであった。ケルシェンシュタイナーは、久しい前から人生は戦い (Kampf) の場であることを知っていた。だが、彼は、戦いは人間の力を解き放ち、男を鍛えるが故に、むしろ戦いを愛することを学んだ。否、そこに男の幸福すら感じた。「幸福は、努力と戦いの中に存する (Das Glück liegt im Streben und Kämpfen)<sup>40)</sup>」、当時彼は、許婚に宛ててこう書き送っている。

かくして、彼は、博士号請求論文のための研究を推進する。その題目は、「第4位有理曲線の特異点に対する判断基準について (Über die Kriterien für die Singularitäten rationaler Kurven vierter Ordnung)」であった。しかし、暫らくして、アンベルク (Anberg) の文科系ギムナジウムから助手 (Assistent) として採用したい旨、彼に申し込みがあった。果たして、彼は、どうするであろうか。彼は、これまで、一旦始めたことはどんなことがあっても仕上げなければ、気の済まない意志強固な男であった。それがここでも実証された。以前あれ程までに待ち望んでいた就職を、学位論文を完成させるためにという理由で彼は断ったのである。

しかし、1年後、彼は、友人の勧めを受け入れ、ミュンヘン中央気象台の助手 (Assistent an der Meteorologischen Zentralstation in München) として就職した。この地位は、彼に月100マルクの収入をもたらし、母を扶養するに十分であった<sup>41)</sup>。しかし、彼は、そこでの仕事に大いに不満であった。なぜなら、バイエルン各地で観測された気象データを整理して、その月平均を計算するといった「精神的に余り刺激を与えてくれない仕事<sup>42)</sup>」が主であり、時々天気図 (Wetterkarte) の仕上げを手伝わなければならなかったからである。だが、彼にとって何より嬉しいことは、学位論文の完成に必要な時間的余裕がたっぷりあることであった。

めでたく彼の論文は完成し、ミュンヘン大学のパウアー教授に提出された。そして、1883年7月31日に、彼は、博士の学位を得るための口述試験 (Doktorexamen) を受け、「最優等 (summa cum laude)」で合格<sup>43)</sup>、博士号を授与された。彼自身、「自分の数学的才能に関しては全然予測を下すことができない」と厳しく採点しているが、その後の彼は、数学の領域においても「全く注目に値する業績<sup>44)</sup>」を挙げているのである。彼の『自叙伝』の最後に付された文献目録には、「数学及び測地学の労作 (Mathematische und geodätische Arbeiten)」として、先述の学位論文のほかに6つの業績を数え上げている——ヴェーレによれば7つである<sup>45)</sup>——が、その殆どがギムナジウムの教師時代に公刊されたものか、あるいは、既に手がけられていたものである<sup>46)</sup>。その意味で、プラントル (Rudolf Prantl) が強調しているように、ケルシェンシュタイナーは、数学者、しかも「心底からの数学者 (von Grund auf Mathematiker)<sup>47)</sup>」であった。そうして、彼の身体にまで浸み込み、血肉化した数学的精神と数学的思考が、良かれ悪しかれ、彼の初期の教育思想の基本的傾向を規定していることはすべてのケルシェンシュタイナー研究者の一致して認めるところであるが、私もこの点を同様に認めねばならないと思う。 (未完)

#### <注>

はじめに

- 1) Bayerisches Staatsministerium für Unterricht und Kultur & Landeshauptstadt München (Hrsg.); Georg Kerschensteiner. Beiträge zur Bedeutung seines Wirkens und seiner Ideen für unser heutiges Schulwesen. Stuttgart 1984, S.10.
- 2) a. a. O., S.16.

- 3) a.a.O., S.10.
- 4) a.a.O., S.19.
- 5) a.a.O., S.10.
- 6) a.a.O., S.7.
- 7) Süddeutsche Zeitung, 15. April 1986.
- 8) 天野正治監訳『現代教育の危機 エーリッヒ・E・ガイスラー来日講演集』, きょうせい, 1981, 4ページ。
- 9) 前掲書, 19ページ及び53ページ参照。
- 10) Bayerisches Staatsministerium für Unterricht und Kultus & Landeshauptstadt München(Hrsg.); a.a.O., S.7.
- 11) a.a.O., S.16.
- 12) a.a.O., S.10.
- 13) Georg Kerschensteiner; Grundfragen der Schulorganisation. Eine Sammlung von Reden, Aufsätzen und Organisationsbeispielen. 7. Aufl., München-Düsseldorf 1954, S.8. (以下 Grundfragen der Schulorganisation と略記)
- 14) Gerhard Wehle (Hrsg.) ; Kerschensteiner. Darmstadt 1979, S.2.
- 15) Leo Weber; Schichtung und Vermittlung im pädagogischen Denken Georg Kerschensteiners. Leipzig 1936, S.1.
- 16) Erich Weniger; Die Eigenständigkeit der Erziehung in Theorie und Praxis. Weinheim 1957, S. 254.

第1部 第1章

- 1) Vgl. (Anton Kerschensteiner); Georg Kerschensteiner. Familie und Vorfahren. München 1954, S.15.
- 2) Marie Kerschensteiner; Georg Kerschensteiner. Der Lebensweg eines Schulreformers. 3. erw. Aufl., hrsg. von Josef Dolch, München-Düsseldorf 1954, S.26.
- 3) Vgl. Marie Kerschensteiner; a.a.O., S.18.
- 4) a.a.O., S.21.
- 5) a.a.O., S.24.
- 6) Vgl. (Anton Kerschensteiner); a.a.O., S.14.
- 7) Marie Kerschensteiner; a.a.O., S.24.
- 8) (Anton Kerschensteiner); a.a.O., S.15.
- 9) Marie Kerschensteiner; a.a.O., SS.24-25.
- 10) Gabriele Fernau-Kerschensteiner ; Georg Kerschensteiner oder "Die Revolution der Bildung". München-Düsseldorf 1954, S.14.
- 11) Vgl. (Anton Kerschensteiner); a.a.O., S.15.
- 12) Georg Kerschensteiner ; Selbstdarstellung, in: Georg Kerschensteiner. Texte zum pädagogischen Begriff der Arbeit und zur Arbeitsschule. Ausgewählte pädagogische Schriften Bd. II. Besorgt von Gerhard Wehle. Paderborn 1968, S.110. (以下 Selbstdarstellung と略記)
- 13) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., SS.27-28.
- 14) Gabriele Fernau-Kerschensteiner ; a.a.O., S.19.
- 15) ペスタロッチー, 皇至道訳「幼児教育の書簡」, 長田新編『ペスタロッチー全集』第13巻所収, 平凡社, 1960, 149ページ。
- 16) 前掲書, 195ページ。
- 17) 前掲書, 149ページ。
- 18) Vgl. Gabriele Fernau-Kerschensteiner ; a.a.O., SS.18-19.
- 19) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.29.
- 20) Selbstdarstellung, S.110.
- 21) Herman Nohl ; Erziehergestalten. Göttingen 1958, S.65.

- 22) Gabriele Fernau-Kerschensteiner ; a.a.O., S.19.
- 23) Selbstdarstellung, S.110.
- 24) a.a.O., S.113.
- 25) Vgl. (Anton Kerschensteiner) ; a.a.O., S.15.
- 26) Eduard Spranger ; Georg kerschensteiner 1932. In : Eduard Spranger Gesammelte Schriften, Bd. XI. Hrsg. von Otto Dürr, Heidelberg 1972, S.404.
- 27) Gabriele Fernau-Kerschensteiner ; a.a.O., S.13.
- 28) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.50.
- 29) Gabriele Fernau-Kerschensteiner ; a.a.O., S.18.
- 30) Vgl. Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.21.
- 31) a.a.O., S.34.
- 32) Selbstdarstellung, S.131.
- 33) Vgl. Gabriele Fernau-Kerschensteiner ; a.a.O., S.37.
- 34) Vgl. Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.80.

第 2 章

- 1) Ludwig Englert ; Wie Georg Kerschensteiner der Münchner Stadtschulrat wurde. Eine Dokumentation zum 75. Jahrestag der Amtseinführung Georg Kerschensteiners am 13. August 1895. München-Stuttgart 1970, S.58.
- 2) Gabriele Fernau-Kerschensteiner ; a.a.O., S.21.
- 3) Vgl. a.a.O., S.20.
- 4) Selbstdarstellung, S.111.
- 5) Grundfragen der Schulorganisation, S.101.
- 6) a.a.O., S.102.
- 7) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.32.
- 8) Selbstdarstellung, S.111.
- 9) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.32.
- 10) Diane Simons ; Georg Kerschensteiner. His thought and its relevance today. London 1966, p.2.
- 11) Vgl. Selbstdarstellung, S.113.
- 12) a.a.O., S.111.
- 13) Vgl. a.a.O., SS.111-112.
- 14) 海後宗臣「ケルシェンシュタイナーの生活と教育思想の発展」、『海後宗臣著作集』第3巻所収、東京書籍、1981、381ページ。
- 15) Selbstdarstellung, SS.110-111.
- 16) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.37.

第 3 章

- 1) Selbstdarstellung, S.110.
- 2) Gabriele Fernau-Kerschensteiner ; a.a.O., S.20.
- 3) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.140.
- 4) Vgl. Georg Kerschensteiner ; Grundfragen der Schulorganisation. 3. Aufl. Leipzig-Berlin 1912, S.263. (以下 Grundfragen der Schulorganisation, 3. Aufl. と略記)
- 5) Selbstdarstellung, S.112.
- 6) Grundfragen der Schulorganisation, 3. Aufl. S.263.
- 7) Selbstdarstellung, S.110.
- 8) Grundfragen der Schulorganisation, 3. Aufl. S.263.
- 9) Selbstdarstellung, S.112.
- 10) a.a.O., S.110.
- 11) Georg Kerschensteiner ; Die Seele des Erziehers und das Problem der Lehrerbildung. 5. Aufl. München-Düsseldorf 1952, S.112. (以下 Die Seele des Erziehers と略記)

- 12) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.39.
- 13) Herman Nohl ; a.a.O., S.64.
- 14) Gabriele Fernau-Kerschensteiner ; a.a.O., S.23.
- 15) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.40.
- 16) Vgl. a.a.O., S.41.
- 17) Die Seele des Erziehers, S.142.
- 18) Selbstdarstellung, S.113.
- 19) a.a.O., S.112.
- 20) Vgl. Marie Kerschensteiner; a.a.O., S.42.
- 21) a.a.O., S.43.
- 22) Grundfragen der Schulorganisation, S.154.
- 23) Georg Kerschensteiner ; Der Begriff der staatsbürgerlichen Erziehung. 9. Aufl. München-Stuttgart 1961, S.38. (以下Der Begriff der staatsbürgerlichen Erziehung と略記)
- 24) Grundfragen der Schulorganisation, S.149.
- 25) Der Begriff der staatsbürgerlichen Erziehung, SS.38-39.
- 26) a.a.O., S.48.
- 27) Gabriele Fernau-Kerschensteiner ; a.a.O., S.24.
- 28) Selbstdarstellung, S.112.
- 29) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.49.
- 30) a.a.O., S.46.
- 31) Vgl. Grundfragen der Schulorganisation, 3. Aufl. SS.263-264.
- 32) Die Seele des Erziehers, S.132.
- 33) Vgl. a.a.O., S.131.
- 34) Selbstdarstellung, S.113.
- 35) Gabriele Fernau-Kerschensteiner, a.a.O., S.26.
- 36) Selbstdarstellung, S.113.
- 37) Vgl. Marie Kerschensteiner; a.a.O., SS.44-45.
- 38) Selbstdarstellung, S.113.
- 39) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.46.
- 40) Selbstdarstellung, S.112.

#### 第 4 章

- 1) Vgl. Marie Kerschensteiner; a.a.O., S.48.
- 2) Vgl. Selbstdarstellung, S.171.
- 3) a.a.O., S.114.
- 4) Gerhard Wehle ; Praxis und Theorie im Lebenswerk Georg Kerschensteiners. 2. neubearbeitete Aufl. Weinheim 1964, S.17.
- 5) Selbstdarstellung, S.114.
- 6) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.49.
- 7) Gabriele Fernau-Kerschensteiner ; a.a.O., S.27.
- 8) Vgl. a.a.O., SS.27-28.
- 9) a.a.O., S.28.
- 10) Marie Kerschensteiner; a.a.O., S.51.
- 11) Vgl. a.a.O., SS.50-51.
- 12) a.a.O., S.51.
- 13) Vgl. a.a.O., SS.51-52.
- 14) a.a.O., S.52.
- 15) Gabriele Fernau-Kerschensteiner ; a.a.O., S.31.
- 16) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.54.

- 17) Gabriele Fernau-Kerschensteiner ; a.a.O., S.31.
- 18) Selbstdarstellung, S.114.
- 19) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.56.
- 20) a.a.O., SS.56-57.
- 21) Selbstdarstellung, S.114.
- 22) Grundfragen der Schulorganisation, 3. Aufl. S.264.
- 23) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.57.
- 24) Grundfragen der Schulorganisation, 3. Aufl. S.264.
- 25) Vgl. Selbstdarstellung, S.171.
- 26) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.57.
- 27) Otto Friedrich Bollnow ; Existenzphilosophie und Pädagogik. Versuch über unstetige Formen der Erziehung. Stuttgart 1959, S.101.
- 28) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.58.
- 29) Selbstdarstellung, S.115.
- 30) Gerhard Wehle ; Praxis und Theorie im Lebenswerk Georg Kerschensteiners, S.18.
- 31) Grundfragen der Schulorganisation, 3. Aufl. S.264.
- 32) Herman Nohl ; a.a.O., S.64.
- 33) Die Seele des Erziehers, S.110.
- 34) a.a.O., S.136.
- 35) a.a.O., S.110.
- 36) Gabriele Fernau-Kerschensteiner ; a.a.O., S.29.
- 37) Gerhard Wehle ; a.a.O., S.18.
- 38) Ludwig Englert ; a.a.O., S.48.

第 5 章

- 1) Grundfragen der Schulorganisation, 3. Aufl. SS.264-265.
- 2) Vgl. Selbstdarstellung, S.115.
- 3) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.60.
- 4) a.a.O., S.65.
- 5) a.a.O., S.61.
- 6) Selbstdarstellung, S.115.
- 7) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.61.
- 8) Selbstdarstellung, S.116.
- 9) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.61.
- 10) Selbstdarstellung, S.116.
- 11) Vgl. Ludwig Englert ; a.a.O., S.44.
- 12) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.62.
- 13) Grundfragen der Schulorganisation, 3. Aufl. S.265.
- 14) Selbstdarstellung, S.116.
- 15) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.227.
- 16) Vgl. a.a.O., S.71. & Selbstdarstellung, S.116.
- 17) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.82.
- 18) Vgl. Selbstdarstellung, SS.116-117.
- 19) a.a.O., S.116.
- 20) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.72.
- 21) Gerhard Wehle ; a.a.O., S.19.
- 22) Marie Kerschensteiner ; a.a.O., S.73.
- 23) a.a.O., SS.73-74.
- 24) a.a.O., S.85.

- 25) Vgl. Selbstdarstellung, S.116.
- 26) Vgl. Marie Kerschensteiner; a.a.O., S.67.
- 27) a.a.O., S.77.
- 28) Vgl. Grundfragen der Schulorganisation, S.207.
- 29) Vgl. Selbstdarstellung, S.116.
- 30) Marie Kerschensteiner, a.a.O., S.83.
- 31) a.a.O., S.84.
- 32) Gerhard Wehle; a.a.O., S.19.
- 33) Selbstdarstellung, S.117.
- 34) Georg Kerschensteiner; Wesen und Wert des naturwissenschaftlichen Unterrichtes. 5. Aufl. München-Düsseldorf 1959, S.3.
- 35) Marie Kerschensteiner; a.a.O., S.76.
- 36) Georg Kerschensteiner; Das einheitliche deutsche Schulsystem, sein Aufbau, seine Erziehungsaufgaben. 2. erw. Aufl. Leipzig-Berlin 1922, S.101.
- 37) Marie Kerschensteiner; a.a.O., S.76.
- 38) Gerhard Wehle; a.a.O., S.20.
- 39) Vgl. Marie Kerschensteiner; a.a.O., SS.92-93.
- 40) a.a.O., S.94.
- 41) Vgl. a.a.O., S.95.
- 42) Selbstdarstellung, S.117.
- 43) Vgl. Marie Kerschensteiner; a.a.O., S.107.
- 44) Hans Kirschbaum; Die Entwicklung der theoretischen Voraussetzungen von Kerschensteiners Pädagogik. Leipzig 1927, S.5.
- 45) Vgl. Selbstdarstellung, SS.224-225.
- 46) Georg Kerschensteiner; Selbstdarstellung. In: Die Pädagogik der Gegenwart in Selbstdarstellungen, hrsg. von Erich Hahn, 1. Bd., Leipzig 1926, SS.13-14 & S.52.
- 47) Rudolf Prantl; Kerschensteiner als Pädagog. Paderborn 1917, S.202.